



ENG WORKS NO. 01

自由の天使ちゃん

第一章

「じゃあ、なんか飲み物持つてくつから先に始めてろよ」

「あ、うん。悪いね」

福来^{ふくらい}恵介^{けいすけ}が部屋を出て階下へ降りていくなり、拝田^{はいだ}礼一郎^{らいいちろう}は持参した勉強道具もそっちのけで、四つん這いになって部屋の床を物色し始めた。

「ちえつ、何だよ……オレが来るからって、わざわざ掃除しやがったのか？」

昨日、事前に「勉強を教えてください」と頼んだのがいけなかったらしい。恵介の部屋は普段よりきちんと整理整頓され、掃除機をかけたらしいフローリングの床は、埃一つない状態だった。こんな事なら、いつものようにいきなり押しかければ良かったと後悔した。

「でもどんなに丁寧に掃除したって、必ずどこかに一本や二本は……」

礼一郎は部屋の中をいざって進みながら、床の隅々まで舐めるように凝視して探し続ける。ふとベッドの下

の暗がりの中にキラリと光を反射するものが目に留まった。胸の高鳴りを抑えつつ、手を伸ばして優しくそっと“それ”をつまみ上げた。

「やった、あったぞ!!」

思わず声が出てしまった。つまんだ指先からの振動を受け、ふるふると震える“それ”。カーブした湾曲部が、時折光を反射してはキラツと光る。愛おしげにそのカーブを指先でなぞり、ボコボコとねじれた表面の感触をうっとり味わっていたその時、背後で声がした。

「おいライチ、てめー何してんだよ?」

振り返ると、飲み物とスナック菓子をのせたお盆を手にも、恵介がこちらを見下ろしていた。

「あつ、いやそのっ……」

慌てて手にしたお宝を握りしめて後ろ手に隠すと、何とかこの場を誤魔化す良い方策は無いものかと頭を巡らせる。

「ハハ……ッ、あーいや、恵介でもエロ本とか隠してたりすんのかなーって……わ、悪かったよ、勝手にあちこち



探ったりして」

我ながらうまい言い訳を思いついたと思った礼一郎だったが、恵介の表情は固いままだった。黙ってお盆をテーブルに置くと、礼一郎の目前へ進み出で、ガシッとその肩を掴んで言った。

「……見せろ」

「えっ」

「何か手に隠しただろ、見せろよ！」険しい表情で礼一郎を睨みつける恵介。

「こ、これはゴミが落ちてたから……」

どうにか言い逃れようとする礼一郎だったが、恵介は彼の腕を掴んでねじ上げ、固く結んだ拳を開かせようとする。揉み合いとなった二人だったが、体格も腕力も恵介の方が明らかに上だ。必死の抵抗も空しく、ついにかじ開けられた礼一郎の掌から、例のモノの姿が露わになってしまった。

「は？　なんでこんなモン……」

恵介の口から驚きと戸惑いの混じった声がこぼれる。

それもそのはず、彼の視線の先、礼一郎の掌にあったのは、なんと一本の縮れた陰毛であった。



「どういふことなのか説明しろよ」

椅子にどつかと座った恵介の前で、うな垂れた礼一郎が正座させられている。例の陰毛を指先で弄びながら彼を睨んでいた恵介だったが、黙りこくったままの礼一郎に大きく溜息をつくと言った。

「なあ、怒らねえから言えよ。何か訳があるんだろ？」

その言葉に、今まで身じろぎもしなかった礼一郎はビクツと肩を震わせると、やがて絞り出すような声でぼそぼそと口を開いた。

「明後日、部の紅白試合があつて……」

「試合つて、野球部のか？」

「うん……その結果次第で、来季のレギュラーを決めるつて、監督が」

「それとチン毛に何の関係があるんだよ？」

まどろっこしいやり取りにややイラついた恵介が語気

を強める。と、慌てて礼一郎が後を続けた。

「——お、お守りに欲しかったんだ!」

「お守り?」

意外な答えに恵介は眉間を寄せ、礼一郎を覗き込むように身を乗り出して訊き返した。

「そ、そうだよ。昔からある風習で、勝負事の時に誰かの下の毛シモを持つてると御利益があるんだって」

「そんな話、聞いたことねえけど」

「本当だってば!! うちの親父だって、競馬に行く時には必ず母さんのを持つて行ってるし!」

ムキになった礼一郎が食って掛かると、思わず二人の視線がかち合ってて見つめ合う形になった。何となく気まずい空気が流れて、互いに視線を逸らしてしまった。

「……だからって、何でオレのなんだよ?」

どこか不機嫌そうな口調で恵介が沈黙を破る。

「オレ、バスケ部だし野球経験ねーし、御利益って事なら部活の先輩にでも貰った方がいいじゃねーか」

「そ、それは恵介が……」



「オレが何だよ？」

正座した膝頭に置いた指がギュツと肉に食い込む。言葉が続けようと口を開いた礼一郎だったが、そのまましばし固まった後、はあっと大きく息を吐くと弱々しく呟いた。

「だってお前、なんでも持つてるじゃん……」

「は？」

「そうだろ、運動も勉強も万能だし、身長高くて顔だってイイ方だしさ。オレ、昔からお前みたいになりたかったんだよ。だから少しでもあやかれたらって……」

礼一郎は頬を赤らめつつ、同時に悔しさを滲ませながら言った。

予想外に褒めちぎられた恵介は、どうにも居心地が悪そうに体を揺らすと、改めて目の前の礼一郎をまじまじと見た。

家が近所な上に、親同士が職場の同僚という縁で、幼い頃から兄弟のように育った二人ではあったが、確かに恵介に比べて礼一郎は容姿才能に恵まれているとは言え

なかった。中学での成績も恵介の方が断然上で、今二人が一緒に通っている高校も、もし恵介がインフルエンザで本命入試に失敗していなければ、別々の学校になっていたはずだ。

また、礼一郎が所属する野球部にしても強豪とは程遠いレベル。部員数も20人そこで、夏に三年生が抜けた今となつては、本来なら二年の礼一郎が順当にレギュラーに選ばれて然るべきなのだ。

つまり、彼がレギュラーの座を争っているのは一年生の部員達なのであった。

「別に……お前だっていい所あんだろ」

「いいよ、無理に慰めてくれなくたって」

出来るだけ感情を表に出さないよう取り成したつもりだったが、長い付き合いのお蔭で礼一郎には通用しなかったようだ。

恵介はしばらくの間じつと礼一郎を見つめていたが、やがてふうつと小さく溜息をつくと言った。

「わかったよ、こんな物でお前が頑張れるんなら、いくらでも呉れてやるよ」

「えっ、マジでいいの!？」

飛び上がって喜ぶ礼一郎の姿を、やれやれという面持ちで眺めていた恵介だったが、やがて真面目な顔に戻ると、手にした陰毛を彼に示してこう言った。

「でもお前、ホントにこいつでいいのか？　これが確実にオレの物だとは言い切れねえと思うけど」

「ど、どうしてだよ？」

「だってチン毛つてとんでもない場所に移動してたりするじゃん。別名『自由の天使』っていう位でさ。こいつはウチの家族の物かも知れないし、ひよつとしたらお前自身の毛って可能性すらあるぜ？」

確かに恵介の言う通りだった。なぜこんな所に？　という場所から縮れ毛が現れた事は、礼一郎自身も何度も経験していた。その事実が気付かされ、すっかり言葉を無くして凹んでしまった彼を前に、恵介は持っていた陰毛をゴミ箱に放り込むと、椅子から立ち上がって仁王立ちになった。

「しゃーねえなあ、ホラ、じか直に取れよ」

そう言うなり、穿いていたスウェットの紐を緩め、下着もろとも膝までずるつと下ろした。

「なっ、なっ、おまつ……!!」

のけ反るように後ろに跳び退り、目玉を剥いて驚く礼一郎。その姿を、恵介は腰に手を当て呆れたように見る。「んだよ、驚き過ぎだろ。ガキの頃は一緒に風呂入ったりしてたじゃねーか」

確かに恵介の言う通りだったが、だがそれは二人が小学生だった時分の話だ。中学に入ってから……正確には毛が生えてからは、互いの局部を見せ合った事は無い。修学旅行の風呂だって、皆の手前、隠した隙間からちらつと目にしたかどうかという程度だ。

実に五年ぶりくらいの再会、すっかり成長して見違えた恵介のシンボルを目前にして、礼一郎の身体は硬直して身動き取れなくなった。目を逸らそうとしても、黒々と生い茂った茂みの中心にずしりと鎮座する圧倒的存在感に、視線が釘付けられてしまう。

「……ちえっ、こっちまで恵まれてんのかよ」

随分と間が空いてから、そんな皮肉めいた恨み節をひ

ねり出すのがやっとだった。

「どうしたよ、チン毛が欲しいんだろ？　自分で好きなだけ抜いていいぜ」

「ええっ、お、オレが抜くのかよ……!?」

しばらく逡巡していた礼一郎だったが、要るなら早くしろ！と強く恵介に促され、おずおずと彼の股間に手を伸ばした。震える指先で鼠蹊部の右脇の辺りの毛束を数本掴むと、覚悟を決めてぐいと引く。

だが恵介の若い毛根は予想以上に強靱で、ただの一本も抜けることなく礼一郎の指をすり抜けてしまった。反動で揺すられた本尊が振り子のように揺れ、礼一郎の手にペタンと当たって跳ねた。

「ごっ、ごっ、ゴメンツ!!」

「痛ってえなあ、下手に加減されると余計痛てえんだよ！　男らしくガツといけ、ガツと!!」

恵介は礼一郎の手首を掴むとグイとその場所へ導き、自分の中心を鷲掴みさせた。礼一郎の手のひらに、恵介のチンポがべったりと貼りつく。茂みにうずもれた指先

からは、体温と汗で蒸れた湿気が伝わってきた。

「へへっ、今日は暑かったからな、蒸れ蒸れの臭チンだぜ！」

チンポを握らせた礼一郎の手に、さらに恵介も上から手を重ねて揉み込むように様にグニグニと動かす。

「ちよっ……おま、ふざけんなって……」

礼一郎は何故か耳まで真っ赤になって狼狽する。

「バカ、何照れてんだよ！　今度はしっかり握って一気に引けよ？　……1、2の、3っ!!」

恵介の号令と共に、礼一郎は目をギュッと瞑って力いっぱい腕を引いた。ブチブチッという感触があり、そつと瞼を開けて拳を確かめると、握りしめた指の間からは7、8本程の陰毛が飛び出していた。

「おー痛ッてえ……なあおい、そのくらいの本数で足りるのか？」

恵介が顔をしかめて鼠蹊部をさすりながら、礼一郎に尋ねる。

「うん……あ、ありがと……」

念願のチン毛を手に入れたというのに、礼一郎はうわ



の空で気の無い応答をただけで、そそくさと後ろを向いてしまった。そして縮れ毛をティッシュに包むと、いそいそと自分のバッグへとしまい込む。

「何だよ、あんなに欲しがってたくせに、もっと嬉しもうにしろよなー。あ、そうそう、言つとくがタダで呉れてやる訳じゃねーからな？」

恵介の言葉に、驚いた礼一郎が振り返る。

「えっ、まさか金取るのかよ？」

「ハッ、テメーの財布の中身なんざタカが知れてんだよ。そうじゃなくて、オレの運を分けてやったんだから、ちゃんと結果出せて事だよ。試合でヒットの一本くらい打ってみせろよな？」

下ろしていたパンツとスウェットをずり上げてイチモツを収納し、ポジション調整をしながら恵介が言う。

「ウン……なるだけ頑張るよ」

今ひとつ覇気を感じられない礼一郎の態度に、恵介はフンと鼻を鳴らし、腕を組んで言った。

「んじゃ、打てなかったら謝罪と罰ゲームな？」

「——なっ!!」

「それくらい当たり前だろ。そうだな……もしヒット打てなかったら、罰としてお前坊主にしろや」

怪訝そうな顔で恵介を見上げる礼一郎。それもそのはず、礼一郎の頭は野球部員らしく、既に2〜3ミリの丸刈り頭だったからだ。

「これ以上どうやって坊主にしろって言うんだよ」礼一郎が呆れた口調でぼやく。

すると恵介はニヤニヤと薄笑いを浮かべながらこう告げた。

「誰が頭丸めろつつたよ。チン毛の対価なんだから、坊主にするのはチンポの毛に決まってるじゃん！」

あっけに取られてぽかんと口を開けたまま、恵介を見上げる礼一郎。

「嫌ならチン毛返せよ。何だよ、打つ自信ねえのか？」

そんな弱気だから一年にまでナメられて、レギュラーも取れねえんじゃねーの？」

嘲るような恵介の挑発に、さすがの礼一郎も力つたなって言い返す。



「わかったよ！ ヒット打てばいいんだろっ、絶対でかいの打ってやるから覚えてろ!!」
 「よし、約束な！ 後になってグジグジ言うんじゃないぞ？」

面白そうにへらへら笑う恵介の前に、まんまと乗せられて大言を吐いてしまった礼一郎は、不安と後悔の入り混じった心持ちで俯くしかなかった。

第二章

「主将^{キャプテン}悪い、オレちょっと抜けさせて」

「ああん？」

「朝から腹の調子が悪くてさ……便所タイムっ」

そう言つてバスケ部の練習を抜け出した恵介は、体育館を出るとトイレのある校舎へは向かわず、一目散に野球グラウンドのある方角へと走り出した。

「そろそろ試合終わる頃だけど……あいつ、上手くやつたかな？」

そう、今日は礼一郎のレギュラー選抜試合の当日なのだ。恵介が息を切らしてグラウンドに到着すると、試合はまだ続いており、丁度8回裏の大詰め場面を迎えていた。

フェンス越しに、ベンチ裏にいた一年生と思われる部員を捉まえて声をかける。

「なあなあ、礼一郎のやつ今日どうだった？」

「え、拝田センパイですか？ ……えっと、今日はまだ3打席ノーヒットですね。内野ゴロが2つと、三振が一つかな。でも次の打席でもう一回出ますよ」

「そっか……」

反対側のベンチへ目を凝らすと、ネクスト・バッターズ・サークルに礼一郎の姿があつた。ヘルメットを目深に被り、ここからはその表情は伺えない。

その時、カキンという金属音がして白球が垂直に高く上がり、キャッチャーフライで打者アウトになった。

2・3塁にランナーがあるのだが、これでツーアウトになってしまった訳だ。点差は5対4で礼一郎のチームが追う展開。シングルヒットでも同点、長打が出れば逆転も可能という、緊迫の舞台が礼一郎を待ち受けていた。

ゆつくりと礼一郎がバッターボックスに進む。何度か素振りをしてから打席に入ると、キツと気合の入った視線をピッチャーに向けてバットを構えた。

その姿に、恵介は少しばかり心が揺らいだ。もしここで礼一郎が凡退すれば、罰ゲームで奴の股間をパイパン

にして遊ぶ事が出来る。それはきつと楽しいイベントに
違いない。だが真剣勝負に挑む礼一郎の姿を前にして、
さすがにそんな邪心を持ち続けることはできなかった。
“打てよ!!” そう、心の中で強く祈った。

ピッチャー振りかぶつての第一球は、外角のボール球
を振らされての盛大な空振りに終わった。続く二球目の
内角低めの速球には手も足も出ず見逃し。早くもツー・
ストライクに追い込まれてしまう。

恵介はチツと舌打ちした。気ばかりはやって空回りし
ているのが傍目にもわかる。

「ライチっ、落ち着いてしっかりボールを見ろ！ お前
ならきつと打てる!!」

思わず大声で叫んでしまった。他の野球部員達は何事
かとこちらを振り向いた。

打席に立つ礼一郎もその声に気付いてハツとなり、少
し驚いたように恵介を見た。二人の視線が正面でぶつか
り、言葉にしくとも互いの意思が交換された。

礼一郎はタイムを取ると、アンダーシャツの襟に手を
突っ込んで、首から下げていたお守り袋のようなものを
取り出した。中身が何であるのか、恵介には言わずもが
なだ。

礼一郎は袋をきつく手に握ると、胸に当てて目を閉じ、
深呼吸する。そしてゆっくり目を開けると、審判に一礼
して再び打席に立った。

二球、冷静に見せ球のボールを見送ってツー・ストラ
イク、ツー・ボールとなる。おそらく次が勝負球になる
はずだ。礼一郎は恵介の方を見ることもなく、ただじつ
とピッチャーだけを見つめている。フェンスの金網を握
る恵介の手が汗でじつとりと濡れた。

ピッチャーがモーションに入り、その腕から白球が放
たれる。全力で振り抜いた礼一郎のバットはボールの芯
を捕え、その渾身の一打は「カキーン!!」という快音を
残しては、センターの頭上を越えて青空へと吸い込まれ
ていった。



「……残念だったな」

恵介の部屋で、まだユニフォーム姿のままの礼一郎が肩を落として座っていた。

親友の慰めの言葉にもしばしの間無言だったが、やがて「ゴメン」とだけ小さく呟く。

「あれはしよーがねえよ。向こうのセンター、超ファインプレーだったもんな」

礼一郎の放った会心の一打は、センターを超えて走者一掃のタイムリーヒットになるやに思われた。だがその長打を追ったセンターの選手は、なんと後ろ向きのままのダイビングキャッチで見事捕球してしまったのだ。

礼一郎と恵介の願いは一瞬で無に帰し、結果は二者残塁のセンターフライとなった。結局、礼一郎は4打数ノーヒット、試合の方も5対4のまま負けてしまったのであった。

「あの……さ、例の罰ゲームは明日までにやつとくから……今日はもう疲れたし、オレ帰るわ」

力無くのそのそと立ち上がった礼一郎だったが、恵介

はそんな彼をじろりと睨むと、厳しい表情で言い放った。

「……ダメだな。約束は約束だ」

恵介は机の引き出しから小型の電気バリカンを取り出すと、礼一郎の前にゴトンと置いた。礼一郎の顔に驚きの色が浮かぶ。

「ま、まさかここでやれっつのか？」

「そうだよ」と恵介。

「なあ勘弁しろよ、今はそんな気分じゃ……」

だが恵介は頑として譲らず、こう言うのだった。

「こういう時こそ、バカな事やって吹っ切った方がいいんだよ。泣き言ばっかほざいてねえで、男らしくとつとと脱ぎな!!」



ベルトのバックルを外し、ユニフォームの下を脱ぐ。ソックスも脱いだ方がいいのか迷って恵介に視線を向けたが、恵介は「早くチンポ出せよ」とニヤリと笑った。仕方なく、すぐすごとスライディング・パンツに手をかける。

「何で今なんだよ……少しはオレの身にもなってくれたっていいじゃないか……」

礼一郎は心の内で恵介を恨んだ。だが約束してしまった以上は仕方ない。それに、ただでさえ今日の試合では一つもいいところを見せられなかったのだ。その上ここでウジウジとごねて、恥の上塗りをしたくは無かった。

えいやつと投げやりな気分でパンツを下ろす。股間が露わになると、恵介は身を乗り出して礼一郎のその部分を間近に覗き込んだ。

「ふうん、お前もそれなり成長してんじゃん」

恵介の言葉に、礼一郎は悔しさで血が上るのを感じた。何故ならそれは皮肉以外の何物でもなかったからだ。礼一郎のそこは、先端までぴっちり包皮に包まれていた。「う、うるせーなっ、皮被り野郎っではつきり言えばいいだろ!!」

「そこまで言っただけよ。でもこれでチン毛無くなったら、マジでガキンちのおちんちんみたくなっちゃうかもなあ」

恵介がニヤニヤしながら礼一郎のモノを玩ぶ。



「いいからとつとと済ませろよ」

恵介の冗談にも全く笑えず、礼一郎は顔を背けて吐き出すように言った。



恵介の命令により、新聞紙を敷いた上に膝立ちの姿勢を取らされた。「自分でやるから」という申し出はにべもなく却下され、両手は後ろに回して股間を突き出すよう指示される。罰ゲームである以上、礼一郎にとやかく言う権利は残されていない。

「んじゃ、いくぞ」

恵介がバリカンのスイッチを入れると、「ブイイイイン」という予想外に大きな音が部屋に鳴り響いてビクツとなった。

いきなりチンポの先端の皮を指でつままれ、「あっ！」と思った瞬間、へそ下に振動するバリカンの刃が押し当てられた。背筋に緊張が走り、歯を食いしばってその時を待つ。つままれたチンポがグイッと下方に引き伸ばさ

れると同時に、バリカンが怒濤の進撃を開始した。

「バババババ……」という音と共に、黒い茂みがみるみる刈り取られていく。

へそから続くギヤランドウはあつという間に四方に吹き飛ばされてしまった。続くジャングル本体に首を突っ込んだバリカンは、その密生した濃いめの陰毛をもっともせずに進み続け、それが通り過ぎた後には、哀れな地肌むき出しの荒野だけが残されていた。

ファサツと軽い音を立てて、絡まった縮れ毛の塊が新聞紙に落ちた。

礼一郎は自分の股間に起こった惨状を目の当たりにして、思わず言葉を詰まらせた。そこはへそから陰茎の根元にかけて、まっすぐに青ぞりのラインが刻まれていた。両側には残された陰毛が左右に広がり、まるで落ち武者の頭部そっくりだ。

チン毛を刈られるくらい、大したことは無いと自分に言い聞かせていた礼一郎だったのだが、これはある意味パイパンよりもみつともない姿だった。あまりの情けな



さに思わず顔が歪む。

「ぶははっ、うっわ何これひでえっ」

礼一郎の暗い気持ちを他所に、恵介は大ウケして馬鹿笑いしている。

そしてスマホを取り出すと、礼一郎の制止する間もなく、無残な落ち武者の晒首を写真に収めてしまった。礼一郎が唇をキッと噛む。さすがに画像をバラ撒かれるようなことは無いだろうが、これをネタに後々まで笑いの種にされるかと思うと、涙が溢れそうになった。

ダメだ、ここで泣いたらもつと惨めになるだけだ。本当ならこんな事、一緒に笑ってふざけてしまえばいいのだろうが、今の彼にはそんな余裕はまだ無かった。必死で零れそうになる涙をこらえるのが精一杯だ。

「バーカ、何泣いてんだよ？」

それに気付いた恵介はまるで同情する様子も無く、むしろ呆れたような口調でからかう。

「泣いて……ねえよっ！」

「フン、泣いたって無駄だからな」

そうやって恵介は、今度は礼一郎のチンポをむんずと

握ると、少し乱暴気味に残りの陰毛を刈り取っていった。小型のバリカンはそのなりに似合わず強力で、ものの一分も経たぬ間に礼一郎の鼠蹊部を蹂躪しては、ジョリジョリの丸坊主へと変えてしまった。

全てが終わると、礼一郎は感情を押し殺した声で「気が済んだかよ」と言いながら、パンツを取ろうと腰をかめた。だが恵介がその手を掴んで制止する。

「まだ終わってねえぞ」

「はっ!？」

驚く礼一郎に、恵介が言い放つ。

「どうせなら剃刀で剃ってツルツルにしちまおうぜ。それにお前、バットやタマにも毛エ生えてんじゃん！こつちも剃刀使わなきゃダメだしな」

「い、いやだよそんなのっ」

「じゃあこのままバリカンでいくか？ キンタマの皮が刃に挟まって、血まみれになるけどいいのかよ？」

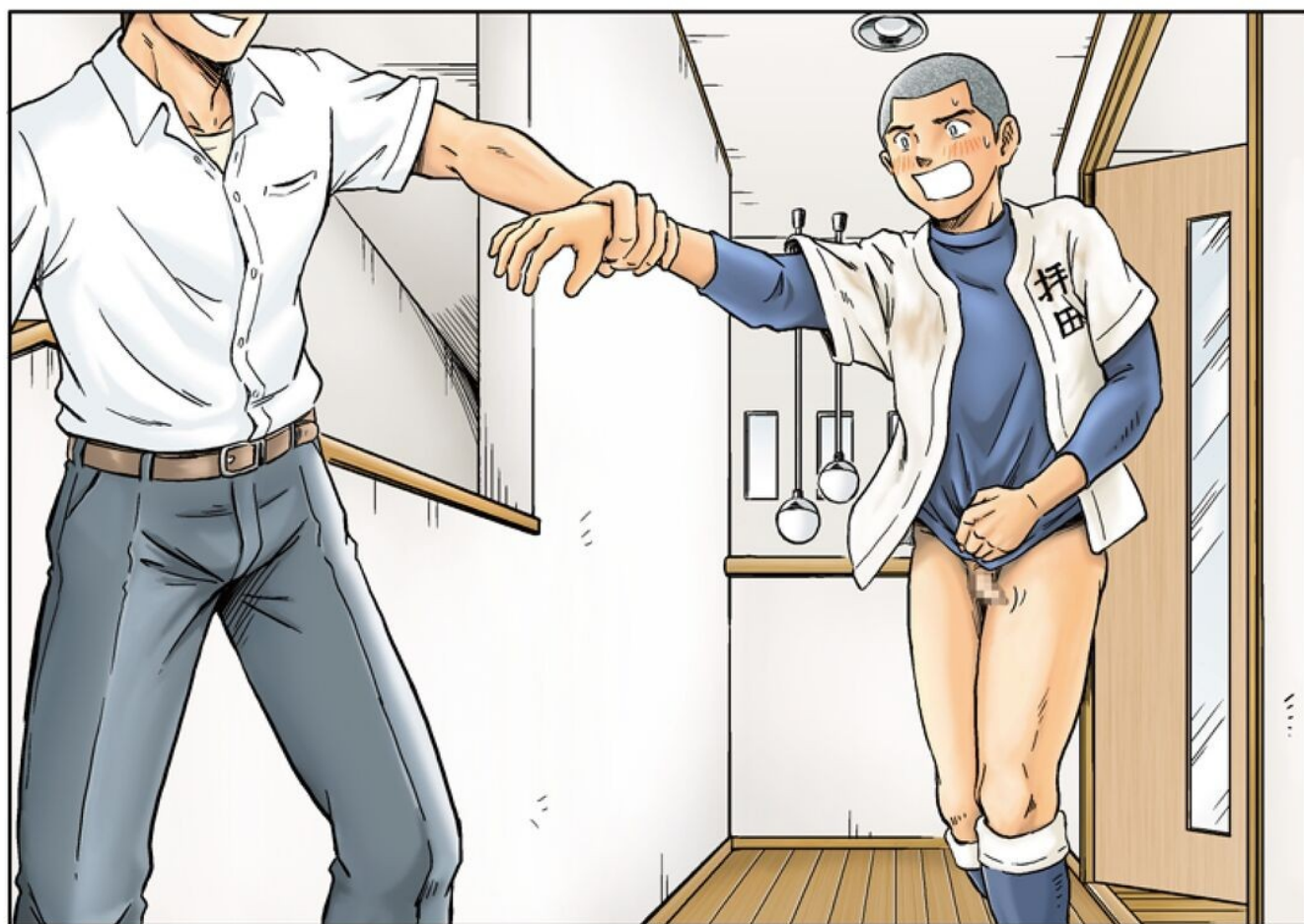
思わず想像してしまい、青ざめる礼一郎。恵介はそんな礼一郎の腕を掴んで立ち上がらせると、そのまま手を

引いて部屋のドアから廊下へと連れ出した。

「ちよつ、ど、どこへ……」

「風呂場だよ。ここじゃ水使えないからな。大丈夫だよ、
親いねえからそのままで」

そして下半身丸出しの礼一郎を、半ば強引に一階の風
呂場へと引き連れて行った。



第三章

無人だとは分かっている、下半身を露出したまま他人の家の中をうろつくのはドギマギした。

チン毛を刈り取られて地肌がむき出しになり、廊下のひんやりした空気が直に股間に触れると、まるで自分が露出狂になったような気がして礼一郎は顔を赤らめた。

風呂場の脱衣所に連れて来られると、恵介は自らのシャツの裾をまくり上げ、そのままポイと脱ぎ捨てた。あつけに取られて礼一郎が見つめる前で次々と着ていたものを脱いでいき、あつという間に全裸になってしまった。先日も見た立派な股間のブツが、裸体の中心でブラブラと揺れている。

「何ばーつとしてんだよ、服着たままじゃ濡れるだろ。お前もさっさと脱げよ」

そう言つて恵介は、礼一郎のユニフォームを脱がせにかかる。

「じ、自分で脱ぐよっ」

慌てて恵介を制し、無理矢理脱がされるよりはマシだと、礼一郎も渋々服を脱いで裸になった。

浴室に連れ込まれ、お互い生まれたままの姿で向かい合うと、礼一郎は改めてその彼我の差に世の不公平を恨んだ。恵介の整った顔、逞しく成長した肉体、そして大半の男たちが羨むだろうあの部分……。

対して己の身体に激しく劣等感を抱いた。頑張った筋トレの成果で筋肉こそそれなりに付いたが、短躯で胴長短足なのはどうしようもなかった。さらには今、彼の股間に大人の象徴たる陰毛は既に無く、小ぶりのチンポが情けなく突き出していた。恵介の巨根と対比されることでそれは余計に際立って見え、まるで子供のドリルチンポのようだった。

「おい、そこに座れよ」

恵介に促されて浴槽の縁に腰掛けさせられる。恵介は礼一郎の正面に陣取つて風呂イスに座ると、シャンプーやリンスの棚から何かのボトルを手に取った。

「……何それ？」

「ん？ シェービング・ジェルだよ。使った事ねえのか？」

髭剃りは電気シェーバー派の礼一郎にとって、それは未知のものだった。透明でねばねばした液体状のものを手の平に絞り出すと、恵介はおもむろにそれを礼一郎の股間に塗りつけた。

「ひゃっ、冷たっ……」

驚く礼一郎を無視して、恵介はジェルを鼠蹊部のみならず、竿や玉全体にまでまんべんなく塗りたくってゆく。股間を揉みしだかれ、その刺激に思わず「んっ」と変な声が出てしまった。

「何？ もしかして感じちゃった？」

恵介が卑下た笑いを浮かべて礼一郎を見上げた。

「んな訳ねえだろっ!!」

慌てて否定する礼一郎だったが、ムキになり過ぎてしまったあたりが、かなり怪しい。

「じゃあ始めるからな。今度は下手に動くとチンポ切れちまうから、じっとしてろよ？」

恵介がシェーバー（いわゆる安全カミソリ）を取って礼一郎の鼠蹊部に押し当てる。金属の冷たい刃の感触に

身体が緊張で強張った。

「ジヨリ……ジヨリ……」という音と共に、チンポの付け根から上方向に剃刀が肌を撫でてゆく。バリカンで刈り損ねた残り毛が、逆剃りされて刃に引っ掛かる感じが背筋をぞわぞわさせた。恵介は全体を一旦大まかに剃り終えると、今度は刃を強めに押し当てて丁寧な深剃りを施してゆくのだった。

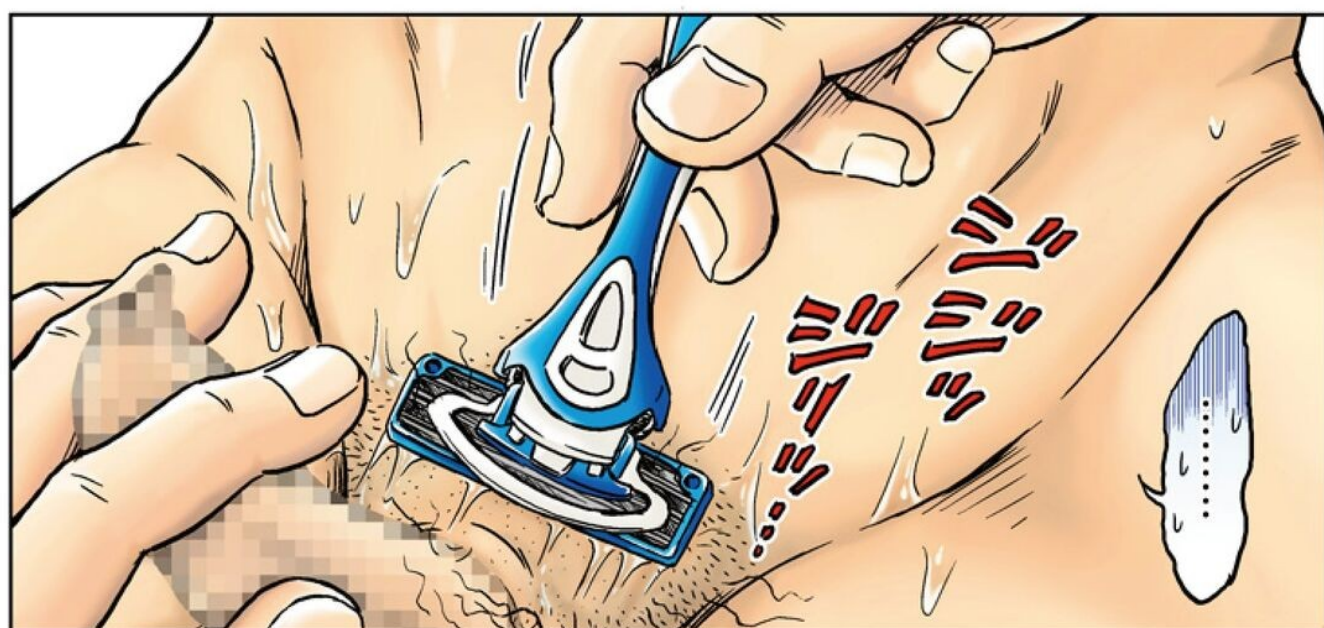
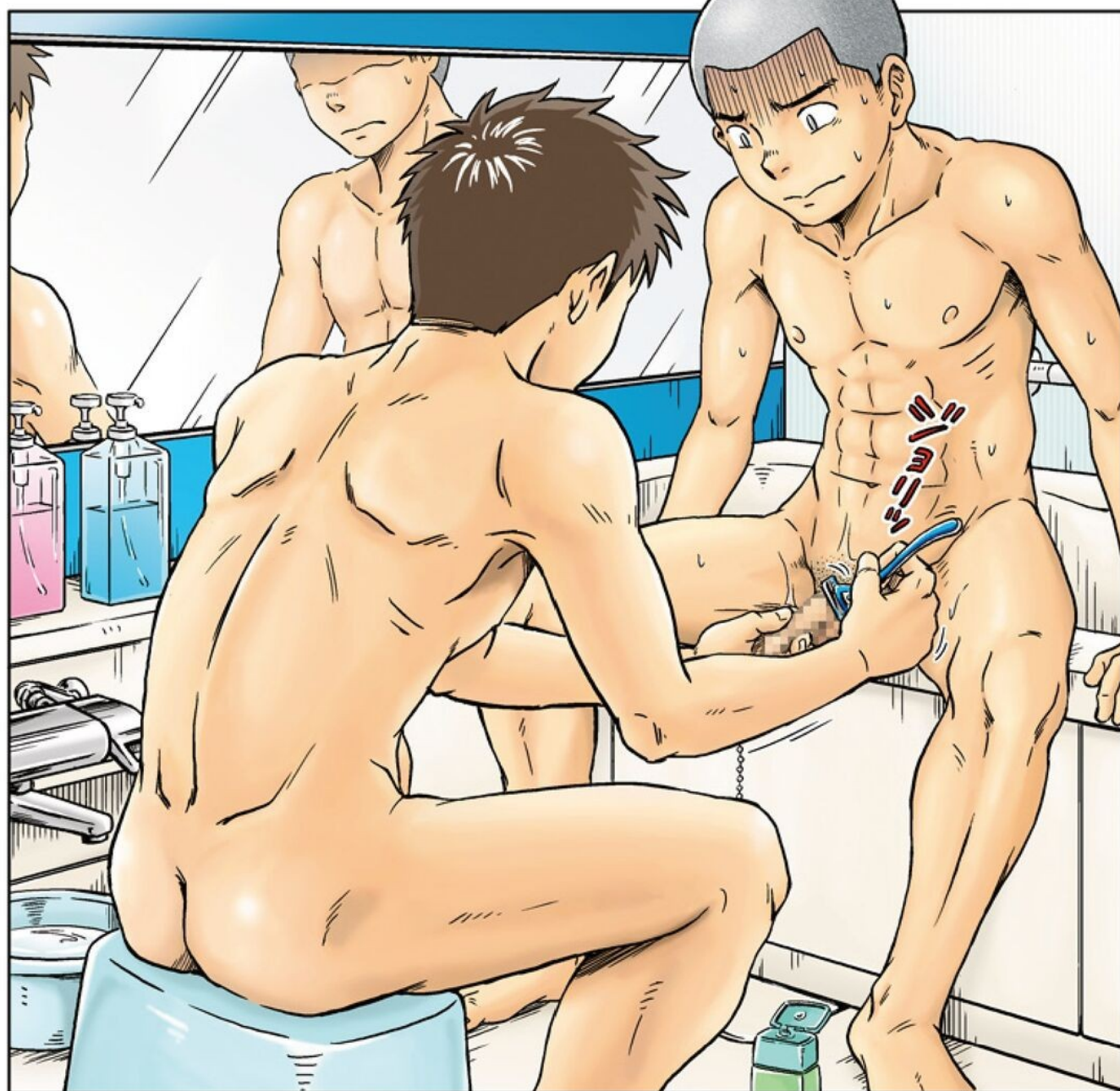
竿や玉袋に生えた毛も丁寧に剃り落されてゆく。竿をつままれて裏返したり、玉の皮を引っ張って皺の間にも剃刀が当てられたが、さすがに今は股間を弄り回されても、先程のような興奮を覚える余裕は無かった。

目をギュツと閉じ、暴れて逃げ出したくなる衝動を必死でこらえながら、一刻も早くこの行為が完了してくれるのを念じ続けた。

「――ま、とりあえずこんなもんかな」

恵介の声に、恐る恐る薄目を開けてみる。見下ろした股間のデルタ地帯に見慣れた黒い茂みは痕跡すらもなく、完全に不毛の砂漠へと変えられてしまっていた。

「ハハッ、本当にガキのチンポそっくりになっちゃった



なっ！ どうだよ、懐かしいだろ」

そう言つて冷やかす恵介の挑発にも、憔悴し切った礼一郎には反応する気力すら残っていなかった。ただ茫然と自分の股間を見つめて無言のままだ。

陰部に毛が生え始めたのは、確か中1の頃だったろうか……久々に対面するツルツルの股間は、懐かしさを覚えるにはもはやセピア色の遠い記憶過ぎた。

それは初めて異質なもの見るようなショックと、いたたまれ無さを礼一郎にもたらした。剃刀の恐怖で縮こまり、普段より一段と小さくなったチンポと相まって、そこは本当に思春期前のように見える。皮膚の下の毛根の若干の青みを除いて、完璧主義者の恵介らしい見事な仕事ぶりだった。

「んだよ、ノリ悪いいなあ」恵介がつまらなそうにぼやく。それでも礼一郎は黙りこくったままだ。

「しゃーねえ、こっちだけでも元氣にしてやるか」

そう言うなり、恵介は礼一郎の竿の先端付近に指をかけると、先端まですっぽり被った包皮をムニツと剥いた。

ピンク色の亀頭が露わになる。

「お、おまつ、何を……んぎゃあああっ!!」言いかけた途中で、礼一郎の言葉が悲鳴に変わった。

剥き出しになった亀頭を、恵介がジェルのついた指で握り込んだからだ。キャップ付きで過保護に育ったそこは、軽く触れられただけで電撃のような激しい刺激を礼一郎の脳に伝えてきた。

「や、やめっ……っ!!」

必死で恵介の腕を押しつけようとした礼一郎だったが、腕力では敵うはずもなく簡単に払い除けられてしまふ。

恵介が礼一郎の額をトンと突く。バランスを崩した礼一郎は、あわや後ろにひっくり返る寸前で壁面の手すりを掴み、もう一方の手は湯船の底に突っ張って、なんとかバスタブへ転落するのを防いだ。

こうなつてはもうお手上げだ。丁度バスタブの縁を跨いでブリッジするような格好となり、両の手で体重を支えるのが精一杯。もはや恵介の攻撃に抗う術は無く、ただひたすら耐える道しか残されていなかった。

そして恵介はというと、今度は亀頭をしつかり握り込んでニユクニユクと揉み込むように刺激してくる。

「んあつ、ああ、あああつ!!」

「へへっ、いい感じだろ? 今日はお前ツイてなかったからな、その分サービスしてやるよ」

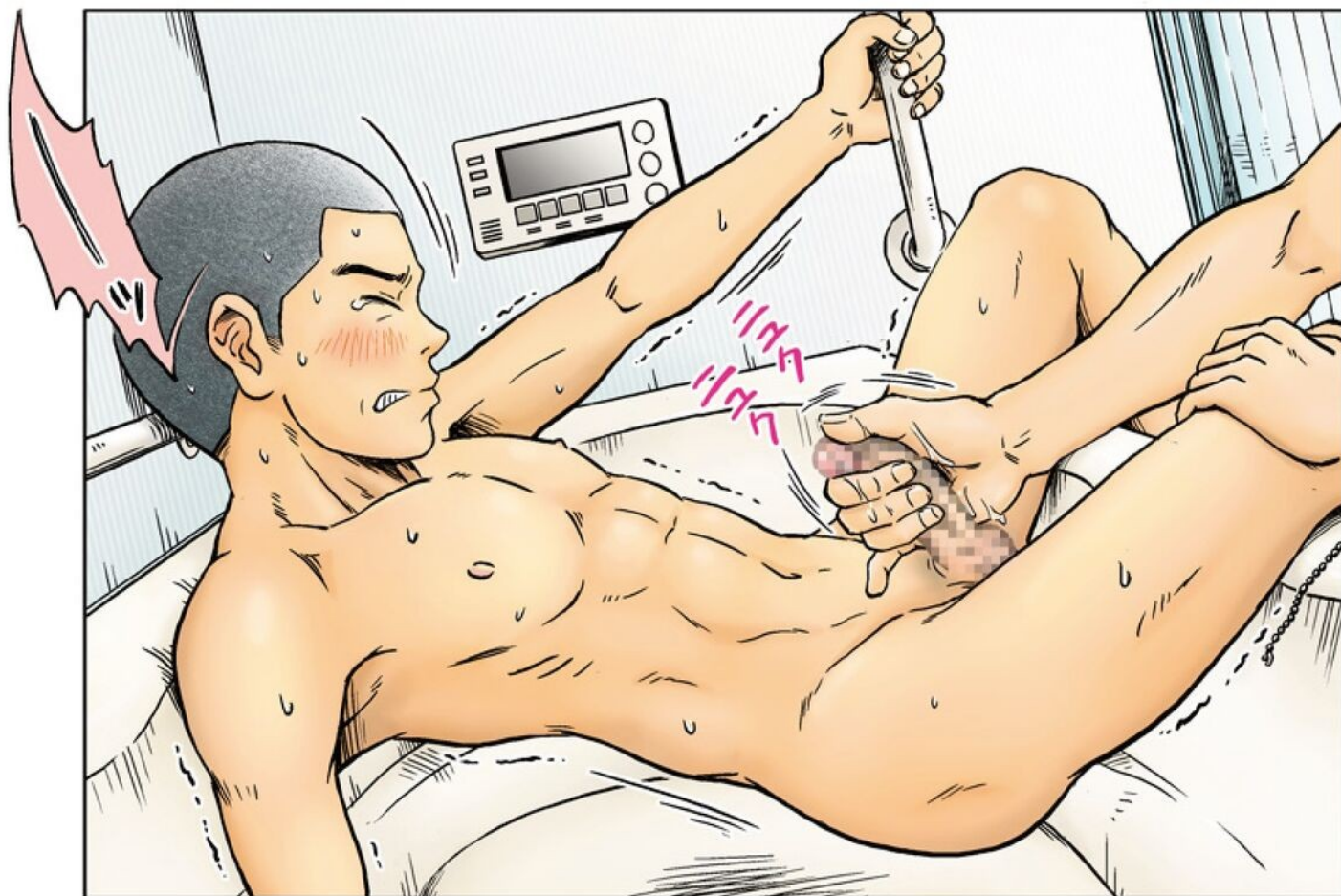
「いつ、要らねえこんなサービスっ! 苦しいだけだからあああつ!!」

事実、強すぎる刺激は苦痛でしかなく、礼一郎は歯を食いしばり、身体をビクビクと痙攣させながら亀頭責めの仕置きに耐えた。そんな彼の様子を楽しんでいるのか、恵介はさらに手の動きを加速させる。

どのくらいの時間が経ったのだろうか。礼一郎にとっては長い長い苦悶の時間であったが、実際はほんの数分だったのかも知れない。

その変化はゆっくりと現れた。

激しい刺激に曝され続けた敏感な部分は、やがて許容限度を超えて神経がマヒし、徐々に感度が鈍くなっていったのだ。それでも苦しい事には違いなかったのだが、



少しだけ余裕の生まれた礼一郎の脳は、湧き上る別の感覚を感じ取り始めたのだ。

それは明らかに快感であった。感度が鈍った分、亀頭に与えられる刺激はギリギリ“性感”といえるレベルまで低下して礼一郎に伝えられるようになった。

数値にするなら苦痛7割、快感3割といったところか。まだ苦痛の方が勝っているけど、若い礼一郎の脳はその中から敏感に快感だけを選んで拾い集め、勃起中枢はその指令に従って使命を果たそうと働き始めた。

“ヤバいつ”

焦った礼一郎は、ムラムラと湧き上がってくる昂り^{たかぶ}を必死で抑え込もうと努力した。だが一旦動き始めてしまった若い性衝動は簡単には止まらない。本人の意思とは正反対に、血流が次々と海綿体に流れ込み、チンポには芯が入ってムクムクとその体積を増してゆく。

当然、それは恵介の手にも伝わっているはずなのだが、彼はまるで素知らぬふりで礼一郎を刺激し続ける。とつくに気付かれているのに、何も言われない事が却って羞

恥心を煽り、多少Mっ気のあった礼一郎に異常な興奮を抱かせる負のスパイラルとなってしまうた。

ついにチンポは透明な先走りまで浮かべて天を衝き、完全に屹立して興奮の雄叫びを上げてしまった。チン毛を失い、根元を隠されなくなった分、普段より少しだけ大きく見える。

そして小ぶりとはいえ、血管を浮き上がらせてそそり立つ姿はやはり青年のそれであり、パイパンのおこちゃま鼠蹊部との対比が際立つ不自然で変態じみた眺めとなった。そしてこの事もまた、礼一郎の興奮の炎に油を注ぐ結果となったのだ。

快感と苦痛と羞恥心がごたまぜとなって押し寄せる中、礼一郎はせめて喘ぎ声だけは出すまいと顔をグチャグチャにしかめて精一杯堪えた。ふと薄目を開けて見上げると、涙で滲んだ視界の中で恵介の熱を帯びた視線とかが合った。

それは今まで見た事の無い恵介の表情^{かお}だった。いわゆる“サド目”と言えはいいのだろうか、獲物をいたぶる肉食獣のような妖しい光を宿す眼光に、ドキンと心臓

が強く打って身がすくむ。

見てはいけないものを見た気がして慌てて顔を背けると、恵介は今まで亀頭だけを責めていた手の動きを竿全体へと拡げ、本格的に礼一郎をしごき上げてきた。

「ああっ、あんっ、んあああーっ!!」

必死で堪えていた声が堰を切って浴室にこだました。

苦痛が勝っていたチンポからの感覚が、はつきりと快感に変わった瞬間だった。皮オナが日常だった礼一郎にとって、手の動きに合わせて引っ張られる皮、特に鈴口の下の三角部分の皮を引かれる刺激は最も性感を感じる部分だったのだ。

純粹な快感を得て、礼一郎の忍耐はあっけなく陥落した。恵介にしごかれる度に、情けなく「くあっ」「はぐうっ」「んいいっ」と嗚咽が漏れてしまう。時折亀頭へ与えられるビリビリくる刺激も、もはや素晴らしい性感のアクセントとなつて彼を悶えさせた。

礼一郎は身体をよじり、のけぞり、太ももをガクガクと痙攣させながら、敗北がすぐ目の前に迫っていること

を悟った。

会陰部の疼きが最高潮に達し、睪丸がせりあがつてくるのが自分でもわかる。尻の穴がキュッと締まり、チンポのずつと奥の方、どこかで精液を堰き止めていたものがフツツと陥落したのを感じた。

「んにいいいいいいい~~~~っ!!!!!!」

食いしばった歯の間から、断末魔の雄叫びが漏れると同時に激しい律動が起こり、ビクンビクンと震える肉棒から熱い白濁液がほとばしった。ゼラチン状の塊をいくつも含んだ濃いザーメンが、その粘度の高さをものともせず宙を飛翔した。

初弾は礼一郎の頭上を越えて風呂の壁面に着弾し、二弾目の大量の精液が礼一郎の額から顎まで一直線にべつとりと貼りついた。続いて首、胸、腹と徐々に飛距離を縮めながら、青臭い粘液が礼一郎を汚していく。

実際には瞼を閉じていたから自分で見えていた訳では無いのだが、真っ白になった意識の片隅で、口にかかっ



た己の劣情の苦みを噛みしめつつ、大量の粘液が自身に降りかかるのを文字通り肌で感じていたのだ。

十回を優に超えるポンピングがようやく終わりを迎えると、荒い息に激しく胸を上下させつつ、腕の力が抜けた礼一郎の身体はずるずると浴槽にずり落ちていった。

……やってしまった。

エクスタシーの余韻が退くにつれ、暗澹たる気持ちに彼をどん底へ突き落す。

パイパンにされ、チンポをしごかれ、恥も尊厳も無く善がつて哭^ないては痴態を晒し、ついには幼馴染の前で盛大に射精シーンを披露してしまったのだ。礼一郎は消えて無くなりたいたい気持ちで一杯のまま、固く瞳を閉じて恵介の嘲笑の聲が浴びせられるのを、今か今かと身を堅くして待った。

突然、右の臉に触れられてビクツとなる。そこは第二弾の精液が直撃した場所だ。恵介の（おそらく）親指が

目頭から目尻へゆっくりと動き、臉の縁に溜まった精液を拭い取ってゆく。目尻に集められた精液が白い涙のよう^うにゆっくり頬を伝って流れた。

「おい、立てるか？」

声と共に左腕を掴まれ、恐る恐る薄目を開けてみると、天井の照明を後光のように背負った恵介の笑顔が目前にあった。かあつと顔中に血が上り、耳まで赤面したのが自分でもわかった。

“くそつ、今から散々馬鹿にして笑うんだろっ”

礼一郎は覚悟して身構えたが、恵介の笑顔からはそのような類のものは一切感じられない。なんというか、むしろ慈愛？　みたいな……？？？

まだまともに動かない肢体を、恵介の助けを借りてバスタブから引き起こす。まるで昔話にある、蜘蛛の糸でお釈迦様に助けられるカンダタのような気分だ。抱え上げられ、浴室の床にペタンと尻をついて座らされると、まだ整わない呼吸を整えながらこれからどうしていいのかわからずに所在無く俯いた。

「少しはスッキリしたかよ？」

恵介の声が天から響く。その声にも嘲笑の色は無く、優しく穏やかなものだった。

「気持ち良かったろ、なあ？」

そう言いながら、恵介が礼一郎の坊主頭をじやりじやりと撫で回した。付いていた精液が頭皮に塗り拡げられるのを感じて「ちよおっ……」という抗議の声がやっと出た。そしてうつかり顔を上げた拍子に、礼一郎はあるものを目にして、その息を飲んだ。

それは勃起した恵介のチンポだった。

まだ八分勃ちくらいではあったものの、フル勃起した礼一郎のモノよりずっと大きい。高校生とは思えないその偉容は、まさに“魔羅^{マラ}”と呼ぶのがふさわしい。長さは優にへそを超えていたし、太い幹にはポコポコと血管をいやらしく這わせ、まるで長い年月を経た大樹のように見える。

唯一、若さを感じさせる薄紅色の亀頭がその上に鎮座していたが、その首も礼一郎の持ち物の二倍はあろうか

という巨大さを誇っていた。

礼一郎の視線は、蛇に睨まれたカエルのように捕えられ、恵介の巨根から目を離すことが出来なかった。彼の視線に気付いた恵介は、ちよっとはにかむように目を細めると、「見てたらこっちまでなんか興奮してさ、貫い勃起ってやつ？」と笑った。

「——つかお前、何日溜めてたんだよ？ すっげー量出たぞ」

照れ隠しなのか、恵介は再び話題を礼一郎に振って戻した。言われて改めて自らの身体を確かめた礼一郎は、その有様に返す言葉を失った。大量に放たれた精液は、時間の経過と共に大分さらさらに変化し、腹側一面を垂れ落ちて滝のような筋をいくつも作っていた。それは自分でもびっくりする程の量だった。

確かに礼一郎にとって、一週間ぶりの射精だった。普段は毎日2・3回のオナニーが日課だった彼なのだが、今日の試合に備えて闘争心を高めようと禁欲した成果がこれだ。溜めて古くなった精液だけあって、臭いもかな



りきつい。辺りには、鼻を突くツンとした青臭いニオイが充満していた。激しくぶっ放してしまった証拠を見せられたお蔭で、またじわじわと羞恥心が蘇ってくる。「まあ、それだけ出たって事はキモチ良かったって事だよな、ん？」

恵介がしてやったりの声で笑って言った。だが今の状況で「キモチ良かった」などとは死んでも言える訳がなかった。

……本当はそれは、疑う余地の無いものだったのだが。確実に、生まれてこの方一番気持ちいい（同時に苦しくもあったが）射精であったと断言できた。初めて他人の手によって導かれ、自分で慰める時とはこんなにも感度が違うのかと思い知った。

それに精神的な興奮度も段違いだ。前々から薄々感づいていたものの、嫌だ嫌だと言いつつ恥ずかしめられる事に興奮してしまう自分……そんな己の性的傾向を、今回ばかりは認めざるを得なかった。

先程までの行為が脳裏にちらつき、礼一郎は胸の奥が

ざわざわし始めた。出したばかりだというのに、チンポがビクンと反応して震えた。慌てて脳裏のエロい回想を振り払い、わざと不貞腐れたように言う。

「も、もう気が済んだだろ……約束は果たしたし、シャワー浴びさせてくれよ」

恥ずかしい自分の射精の痕跡を、一刻も早く消し去ってしまわなければ。

「んー、まだだな。もう一か所残ってる」

「えっ!?」 恵介の言葉に息を飲む礼一郎。

「ケツ毛も剃らなきゃダメだ。さっきお前がバスタブに落ちた時、ケツの穴の周りに結構毛エ生えてんのぼっち見えちゃった」

「――!!」

あまりの衝撃で思わず尻を隠しそうになった（床に尻をついていたから、その必要は無かったのだが）。そこは彼にとって、チンポ以上に見られたくない場所だったからだ。

「い、いやだよっ！ 約束はチン毛だけのはずだろ!!」

顔を真っ赤にして全力で拒否をした。だが恵介も頑と

して譲らない。

「お前、金玉の裏からケツまで毛が繋がってるんだぜ。どこまでがチン毛で、どこからがケツ毛なのか区別つかねえだろ、だから全部剃る！」

「そんな、無茶苦茶だっ!!」

泣きそうになりながら抗議した礼一郎だったが、押しの強さで恵介に敵わないことは幼い頃から散々経験済みだ。そして今回もまたそうなるのは火を見るより明らかだった。ただでさえ弱い立場なのに、現在の身体中ザーメンまみれの姿とあつては、礼一郎に人権など無いに等しい。

「ほら、そろそろ自分で立てるだろ、手エそこについて、ケツこっちに向けるよ」

恵介の命令に、重い身体と心に鞭打つと、渋々立ち上がるしかない礼一郎なのであった。

第四章

バスタブの縁に両手をかけ、脚を大きく開いて尻を突き出す姿勢を取らされる。恵介がその後ろに陣取り、割れ目の暗がりを見込んだ。当人ですら鏡でしか見た事の無い秘密の場所を他人にまじまじと見つめられ、礼一郎は屈辱で死にそうな気分になった。

「へええ、ケツの穴ってこうなってるんだ。あ、今キュッてすば窄まった！……こんなちっこい穴から本当にウンコ出るのかよ」

恵介が尻たぶに指をかけ、ムニーツと割れ目を開く。アナルのひだも引っ張られて引きつり、内部がわずかに外気に触れてひやっとした。

「お、おいつ、よせよっ！」

慌てて後ろを振り返ろうとした礼一郎だったが、その途中で鏡に映る己の姿と出くわしてギクリとする。浴室の壁に設置された大きな鏡には、バカみたいに突き出した尻をつぶさに観察されている自身の姿があった。その



被虐的な光景に顔面が火を噴いたように熱くなり、同時にみぞおちの辺りが落ち着かなくなる。

こんな事で興奮してしまう自分がやはりいた。礼一郎は自己に潜む変態性を確かに感じ、本心から泣きたい気持ちになったが、だが心とは裏腹に興奮はなおも掻き立てられ続けた。

「そうだ、せっかくだからこれも使ってみるか」

恵介はそう言うなり、先程礼一郎が放出したぬめった液体を下腹部からかき集めると、ジェルに混ぜてアナル周辺に塗りつけた。

自分の精液を潤滑剤に尻の毛を剃られる屈辱……どうして恵介はこうも的確に礼一郎の弱点を突いてくるのだろう。恵介の指で肛門付近を撫で回される度に、礼一郎のそこはヒクヒクと収縮を繰り返した。

再び剃刀の冷たい感触が押し当てられる。要領はチン毛の時と一緒だ。恵介は、裏玉や尻の周辺部に生えた毛から順に片付けてゆく。礼一郎の方も多少は剃刀の感覚にも慣れたのか、恥ずかしさは別にして、どうにか平静を保ったまま作業に耐えていた。

だが作業が中心部に近づくにつれ、礼一郎の中の不安がムクムクと頭をもたげてくる。アナルの菊の部分は明らかに他の場所の皮膚と違って柔らかく、弱くて傷付きやすいように思われた。万が一、手が滑って剃刀の刃が肛門を切り裂いてしまったらと考えた途端、背筋につうと冷たいものが走る。

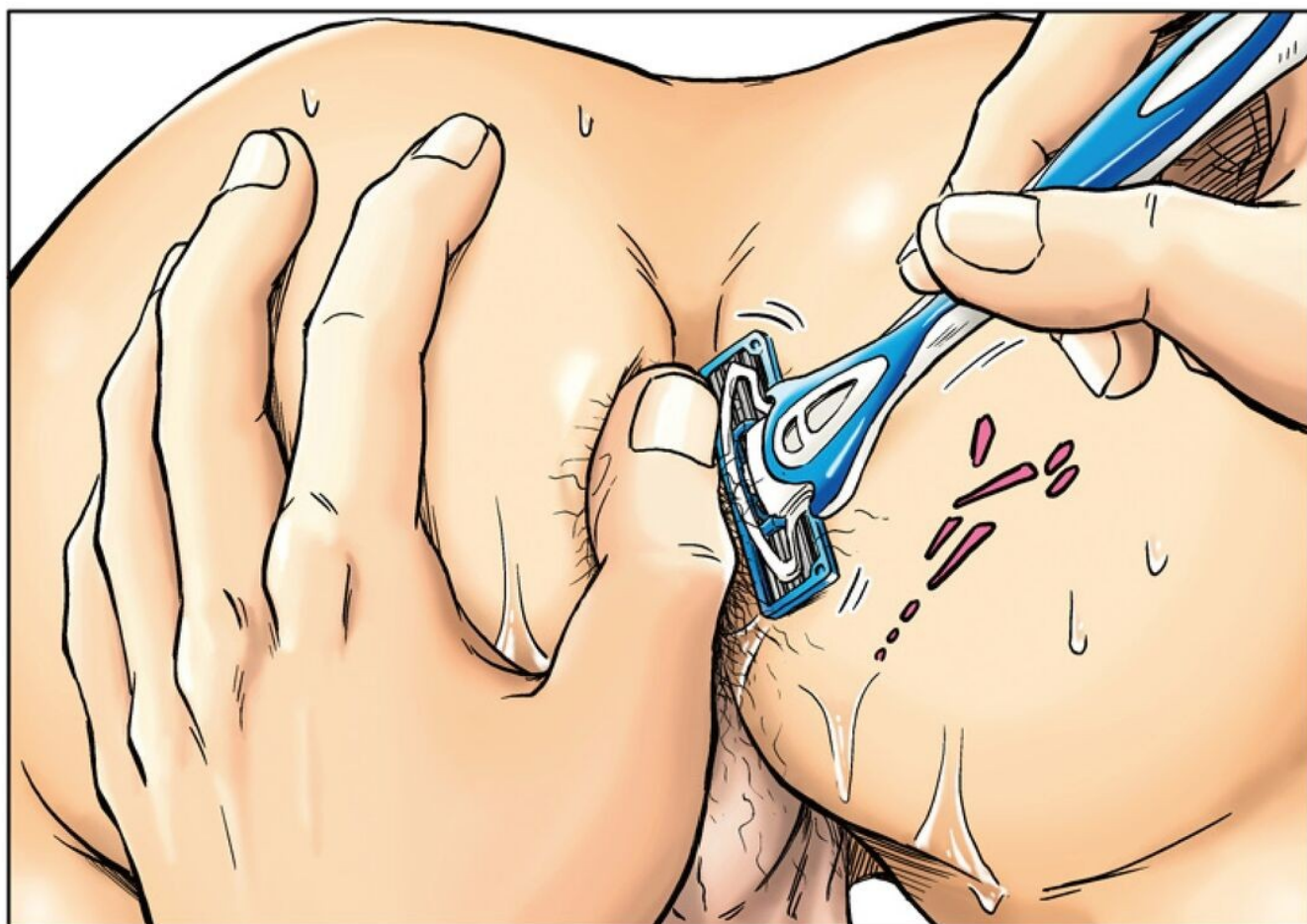
「な、なあ、怖ええよ……」

たまらず泣き言が口をついてしまった。

「ん、大丈夫だよ。穴んところはちゃんとガードするから」
そう言うのと、恵介は礼一郎のアナルに指の腹をぴたりと押し当ててきた。

尻穴に蓋をされる初めての経験に、礼一郎はウツと息を飲んだ。突如、得も言われぬ感情が身体の中をぐるぐると渦巻き、狼狽が隠せない。それは自分でもまったく予想していない動揺だった。

一体どう表現すればいいのだろう……何か人として大切な物を失ったような心許なさともいえるべきか。たかが排泄口を塞がただけで、苦痛を伴う事態では無いに



もかわらず、それは自らの身体の支配権を失い、他者の軍門に下ったかのような落ち着かなさを彼にもたらしただ。まるで自分が無力な幼児になったような強烈な印象に、礼一郎は戸惑いを禁じ得なかった。

だが恵介はそんな事にはまったく気付きもせず、押し当てた指を保護用のガードにして、アナルの際ギリギリに生えている毛を剃りあげてゆく。指の蓋の感覚と、比較的太さのある毛がプツプツと切断されてゆく感覚に、礼一郎はいても経ってもいられないジリジリした気持ちを必死で押し殺して耐えた。

剃刀の感覚が肛門を一周し終え、塞がれていた指がどけられる。

「……終わったの？」

緊張が緩み、変な汗がどつと噴き出した。

「どうか……ちょっと確かめる」

恵介の指がアナルの周囲を撫ぜ、剃り残しの毛が無いかと這ってゆく。やがてその指は中心へと回帰し、礼一郎のアナルに再びぴっちり蓋をした。

「だ、ダメなのかよ？」

もうこれで終わりにしたい気持ちでいっぱいなの礼一郎が、泣きそうな声で尋ねる。だがしばらく待ってみても恵介からの返答はなかった。

痺れを切らした礼一郎が振り返って様子を伺おうとしたその時、押し当てられていた指の力がグッと増したかと思うと、固く閉じていた蕾をこじ開ける様に無理矢理内部へと押し入ってきた。

「んあつ!!」大きな嬌声が風呂場に響き渡った。

背を弓なりに反らせ、礼一郎が悶えたその間にも恵介の指はさらに深く差し込まれた。指の根元まで潜り込むと、今度は指先をクイと曲げて腹側の腸壁をグイッと押し込んでくる。

そこは礼一郎のスポットであった。前立腺をグリグリと揉みしだかれ、切羽詰って居られない感覚……そして礼一郎にとってはたまらない快感が脳髓へと駆け上ってくる。

「恵介何を……っ、クウウッ……!!」

礼一郎が言い終わらない内に指が2本に増やされ、ぐちゅぐちゅと直腸内をかき回された。

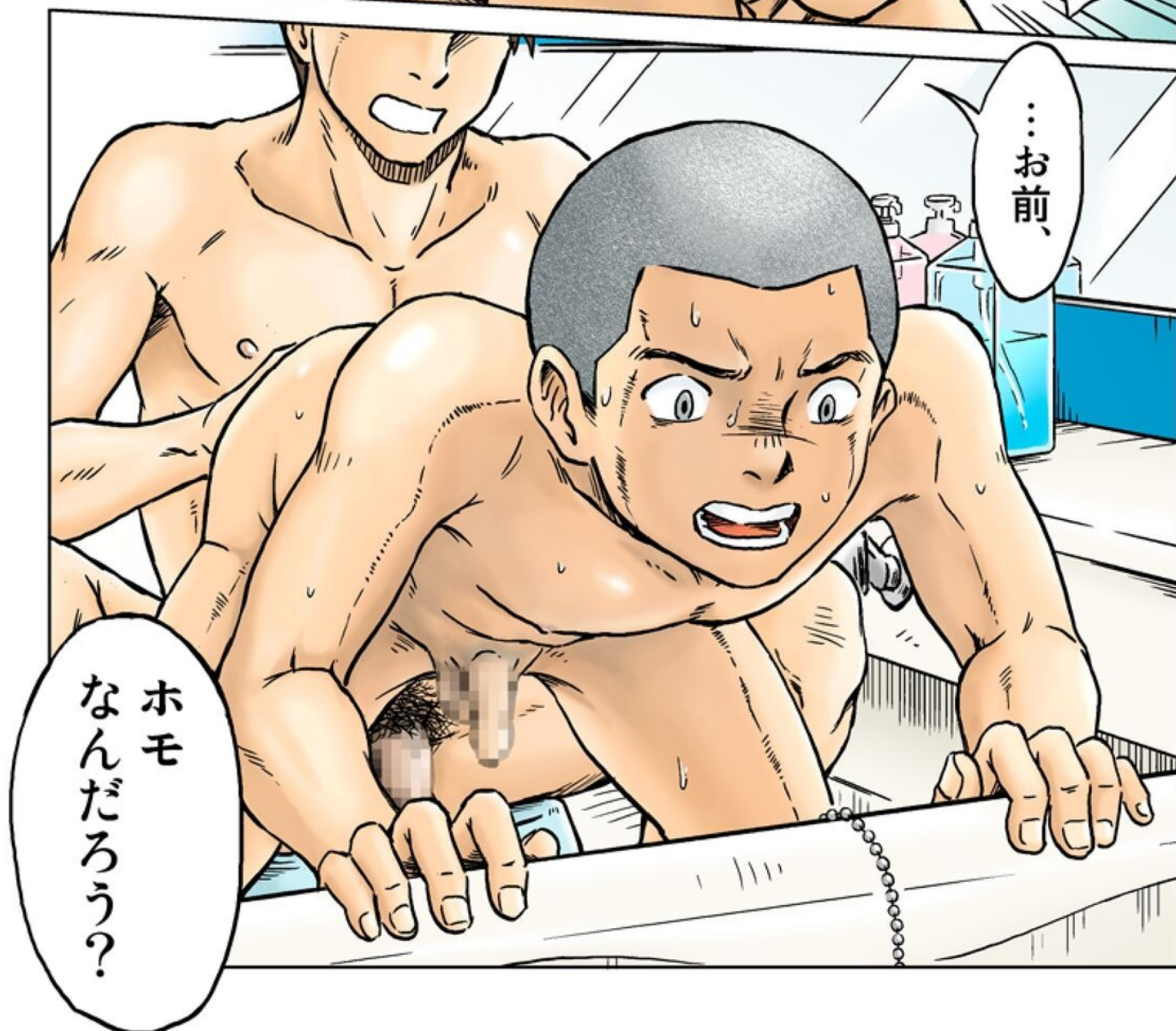
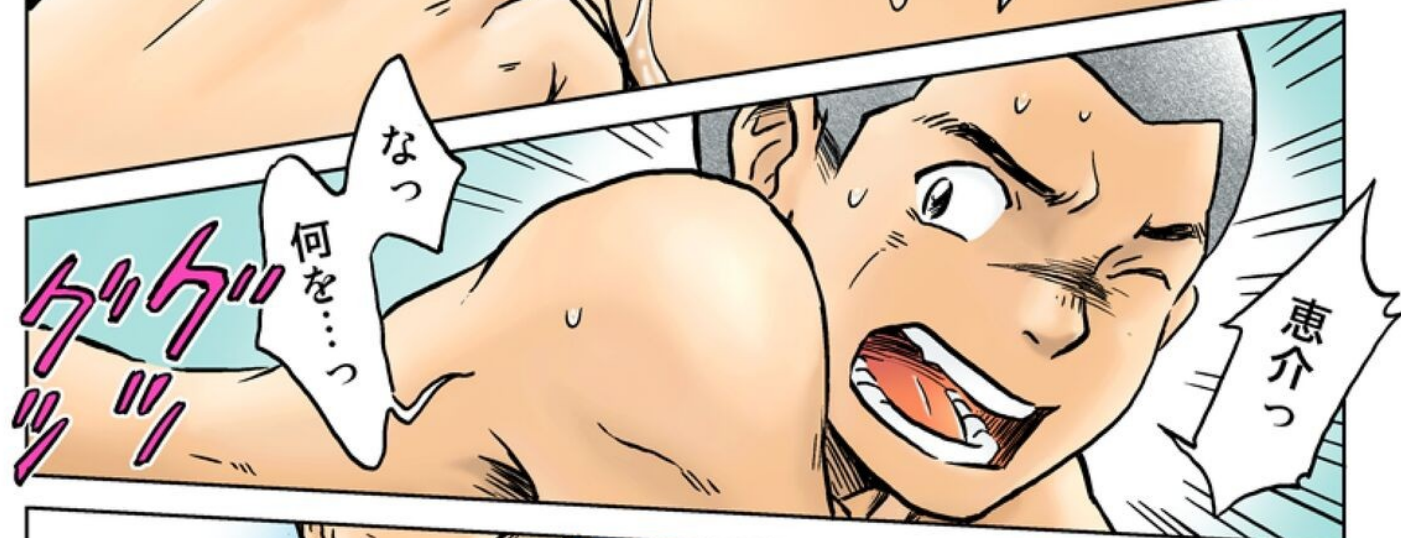
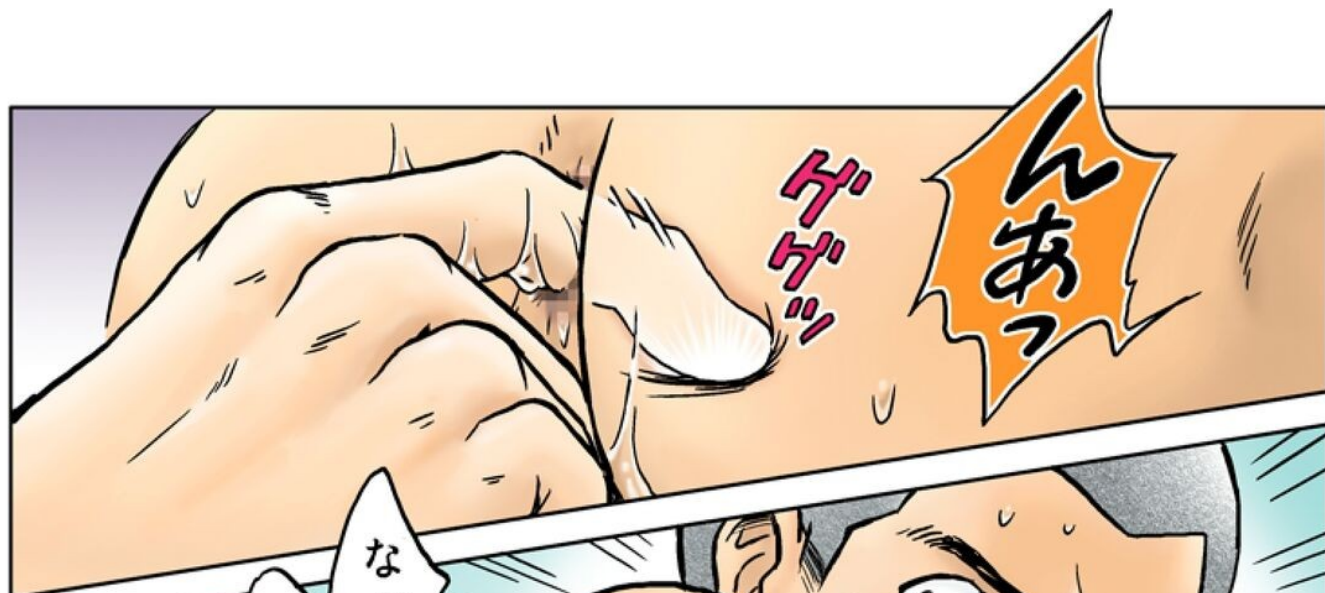
「ふーん、やっぱり感じちやうんだ？　もしかして普段オナニーする時も、ケツ弄ってたりすんのか？　ここにチンポ挿れられるの想像しながらとかさ……」

恐怖が沸き上がり、頭の中に一杯になる。恵介が何を言っているのかわからない。そんなはずはない、感づかれるようなヘマをした覚えは無いのだ、なのに何故……。何か弁解しなくてはと思うのに、頭の芯が痺れたようになって身じろぎ一つ出来なかった。

「……お前、ホモなんだろ？」とうとう核心が恵介の口から発せられる。

「まさか、バレてないつもりだったのかよ？　着替えの時とか、いつもオレの事チラ見してたよな。そういやこないだチン毛抜かせてやった時だって、お前勃ってたの、バッチリ気付いてたんだぜ」

黙りこくってしまった礼一郎に、恵介が衝撃の暴露を畳み掛ける。礼一郎はもう、何が起きているのか自分



でもわからなくなった。ただガンガンという割れ鐘のような鼓動が空つぽの頭の中で鳴り響き、耳の奥が痛くてたまらなかった。

そして恵介は、なおも礼一郎の尻を刺激し続ける。指が3本まで増やされ、ゴプツ、ゴプツという汚い音が発せられた。

「簡単に開いちまったな……やっぱ自分でも弄ってんだろ。なあお前さ、ここ誰かに掘られた事あんの？」

だが礼一郎からの反応は何も無く、イラついた恵介は前立腺を力一杯押し込んだ。

「ぎいっつ!!」

「ちゃんと質問に答えろよ!!」凄味の効いた声色に、礼一郎は慌てて大きく頭を振って否定した。

「なんだ、まだ童貞……じゃなくてバージンか。お前、奥手だもんなあ」

恵介のからかうような口調に、礼一郎の目からやっと涙がポタリと落ちた。恵介の言った事は、半分は当たっていたけれど、もう半分は間違っていたからだ。

自分が同性愛者だという事実を、何度も否定しようと

試みたのは思春期の話。あれから何年も経ち、今はそんな自分を受け入れるしかないと悟っている。それでも礼一郎は、まだ具体的な行動……つまり実際の性行為を経験する覚悟が出来ずにいた。

何故ならそれは、幼い頃から憧れ、目標としていたライバルと同じ場所に立てなくなる事を意味していたからだ。いつか恵介に認められたいという願いは、少年漫画の主人公のように純粋なものだったはずなのに、いつしかそれは邪な欲望に浸食されてしまっていた。そして彼の理性は、その事を心の底から嫌悪した。

恵介に抱かれない、求められ、自身の全てを捧げたいという想い……いつかこの恋慕を断ち切れる日が訪れるまでは、自らの性的志向を封印しておこうと、堅く心に誓っていたのだった。

「なあ、挿れて欲しい？」

恵介の声にハツとなる。

いつの間にか指は抜かれ、代わりに別の感触を感じる。慌てて壁の鏡に目をやると、恵介は自身の完全にエレクト

トした特大チンポを、礼一郎の尻に押し当てていた。

「アナルセックスも気持ちいいって話だしな、なんなら特別にサービスしてやってもいいぜ」

礼一郎は完全にパニックに陥った。

“ダメだ！ 絶対に拒否しなければ!!”

そう思って口を開くも、喉はカラカラで呻き声の一つも出ない。それどころか、彼の中の欲望がこの上ない機会の到来にマグマのような欲求を突き上げてくる。YESもNOも、どちらの行動も取る事が出来ない。礼一郎は相反する二つの自己の板挟みとなり、ジレンマでフリーズしてしまった。

「おい、何も言わねえならOKって事なるけど?」

押し当てられた巨大な亀頭がググツとその圧を増す。礼一郎の理性は侵入を拒むべく入口を締めようとしたが、原始の欲望は一刻も早く犯されようと逆にアナルをヒクつかせた。突き立てられた恵介の砲身が、じわじわと菊の花弁を開いていく。

ハアッ、ハアッと荒い息を吐き、絶え間なく涙を流し

ながら、礼一郎は自身がレイプされてゆく感覚を味わった。レイプ魔は恵介ではない。礼一郎を強姦しようとしているのは、他でもない礼一郎自身だ。彼は見えない鎖に繋がれ、その中心を犯されるべく強要されていた。

入り口が限界まで広げられ、恵介の張り詰めた亀頭が、括約筋の狭い輪をムリムリとこじ開けてくる。あまりの圧迫感に血の気が引いた。

“切れる!!” そう思った次の瞬間、グポツと嵌り込む爆発的な感覚と、同時に快楽と苦痛の衝撃が中に弾け、礼一郎は変な呻き声を発して一瞬気が遠くなった。

「ひあっ……あ、あああ……っ」

アヒルの卵ほどもある巨大な亀頭が、礼一郎の前立腺を潰しながら進む。大きく張り出したカリが直腸の肉壁を擦り、己の指では届かなかった未知の領域の存在を教えた。行き場を失った内臓が圧迫される鈍痛を伴いながら、恵介の巨体は肉の海を進み、ついにはその全てを礼一郎の内部へと納めてしまった。

礼一郎は全身に脂汗をかきながら、その圧迫感に必死で耐えていた。意識して括約筋を緩めていなければ、輪が切れてしまいそうだった。S字結腸に鈍痛を、尻には恵介の陰毛を感じ、自身が端から端まで貫かれてしまった事実をまざまざと自覚した。

“……犯されてしまった……”

礼一郎の目から、大粒の涙がぼたぼたと落ちた。ああ、これでもう恵介と対等な関係ではいられなくなってしまったのだ。しかしその一方、彼の股間のものはいつの間にか限界まで張りつめ、時折ビクビクと首を振っては、透明な滴を床に垂らしていた。

「すげ……ホントに全部挿入^{はい}しちゃった……」

耳元で恵介のかすれた声が囁く。礼一郎ははたと我に返り、泣き顔を見られまいと腕で涙を拭ったが、恵介が目ざとくそれを見つけてしまう。

「えっ、泣いてんの？　もしかして痛かったのか？　だっ
てお前のチンポずっと勃ちっぱだったからさあ……」

礼一郎は鏡の存在を思い出し、思わずそれを見てしまった。尻を犯され、それでも歓喜の声を上げている恥辱の象徴……挿入の最中、ずっとこれを恵介に見られていたのかと思うと、死んで消えてしまったかった。

「うるさいっ、これくらいどーって事ねえよっ!!」

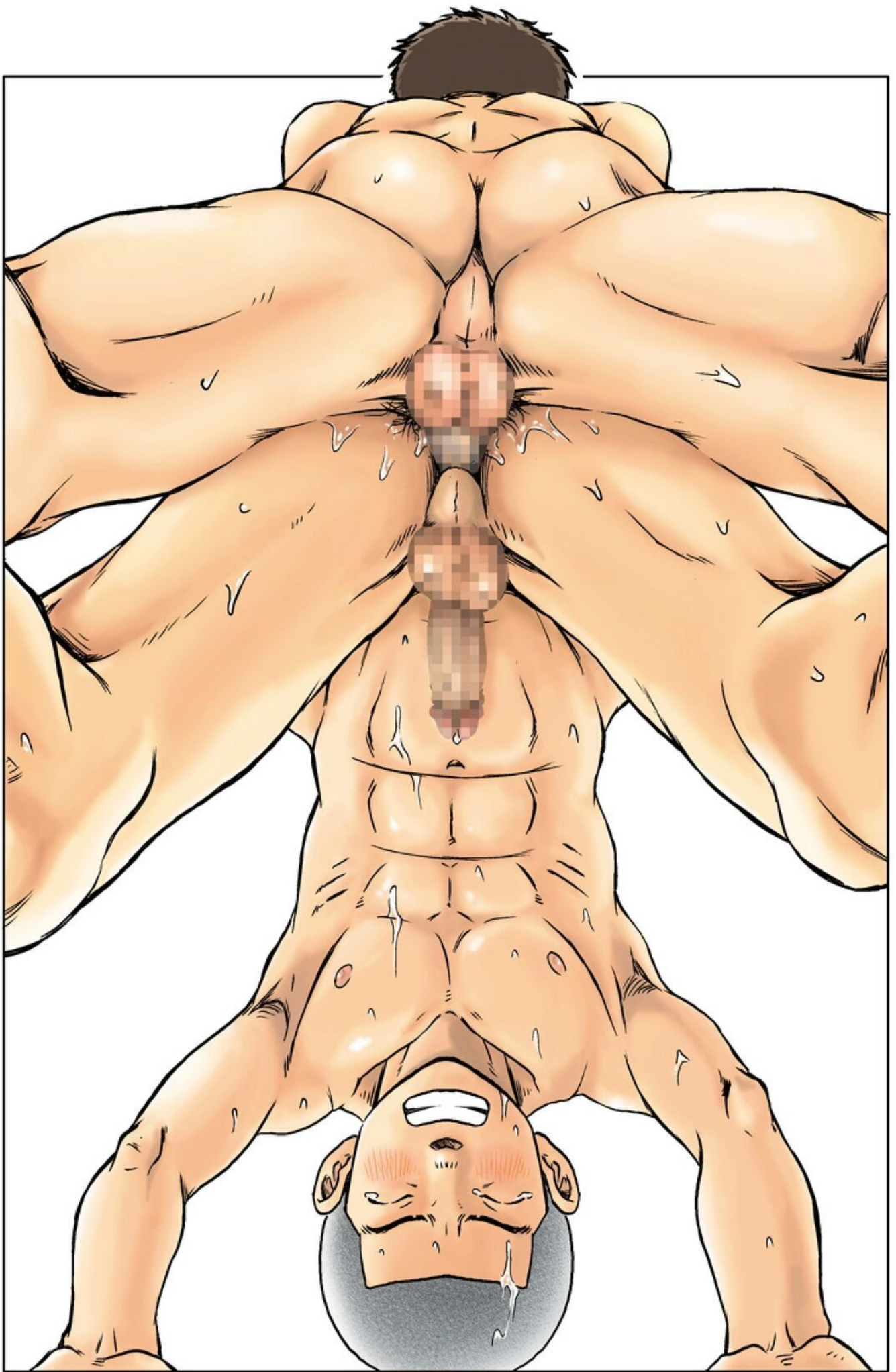
何もかも失い、やけになった礼一郎が叫ぶ。そうだ、こうなったらもう堕ちるところまで堕ちてやる!!

礼一郎は自ら腰を振り始めた。まだ馴染んでいない内
部を、恵介のチンポがえぐるように往復する。鋭い痛みが走ったが、それすらも今は救いだった。礼一郎は自らを傷付けることでギリギリ心を保ち、軽薄な淫乱を演じずにはいられなかった。

「うあっ、何これやべえっ……」

背中越しに恵介が小さく叫ぶ。そうだ、とつととコイツを逝かせて終わりにするんだ！　礼一郎はさらに大きく腰をグラインドさせ、恵介を追いこもうとスピードを上げた。

だが次の瞬間、礼一郎は自身を握り込まれ「ウツ」と呻いた。恵介が礼一郎のチンポをグチュグチュと扱く。



同時に、根元まで挿入していた巨根を半ばまで抜くと、再び礼一郎のスポットをグイと衝いた。

「フアッ!!」

礼一郎の視界が一瞬スパークして真っ白に飛ぶ。それは恐怖に近いほどの快感だった。今まで自慰を行う際にも、時折アナルを弄って自ら開発済みではあったのだが、それでも尻にここまで快感を得た経験は無かった。恵介との相性なのか、それとも初体験の興奮で感度が上がっているのかわからないが、危険なまでに感じ過ぎる自身の肉体に、礼一郎は怯え、そして悶えた。

「け、恵介そこダメツ、イツ……」

言いかけて慌てて言葉を噛み殺す。そうだ、この勝負だけは負ける訳にはいけないのだ。死んでも先にイカされるなんて事があつてはならない。

「もうイツちゃいそう？　じゃあ弄るのは先っちょだけにしておくか」

恵介は礼一郎の決死の覚悟をあざ笑うかのように、今度はチンポの先端だけを弄り始めた。またしても亀頭責め・悪夢の再来だった。そして前立腺を押し込んでい

た自身のチンポは、ピストン運動に切り替える。

「ん、いいいいいいいっつ!!」　たまらず礼一郎がヨガリ狂う。

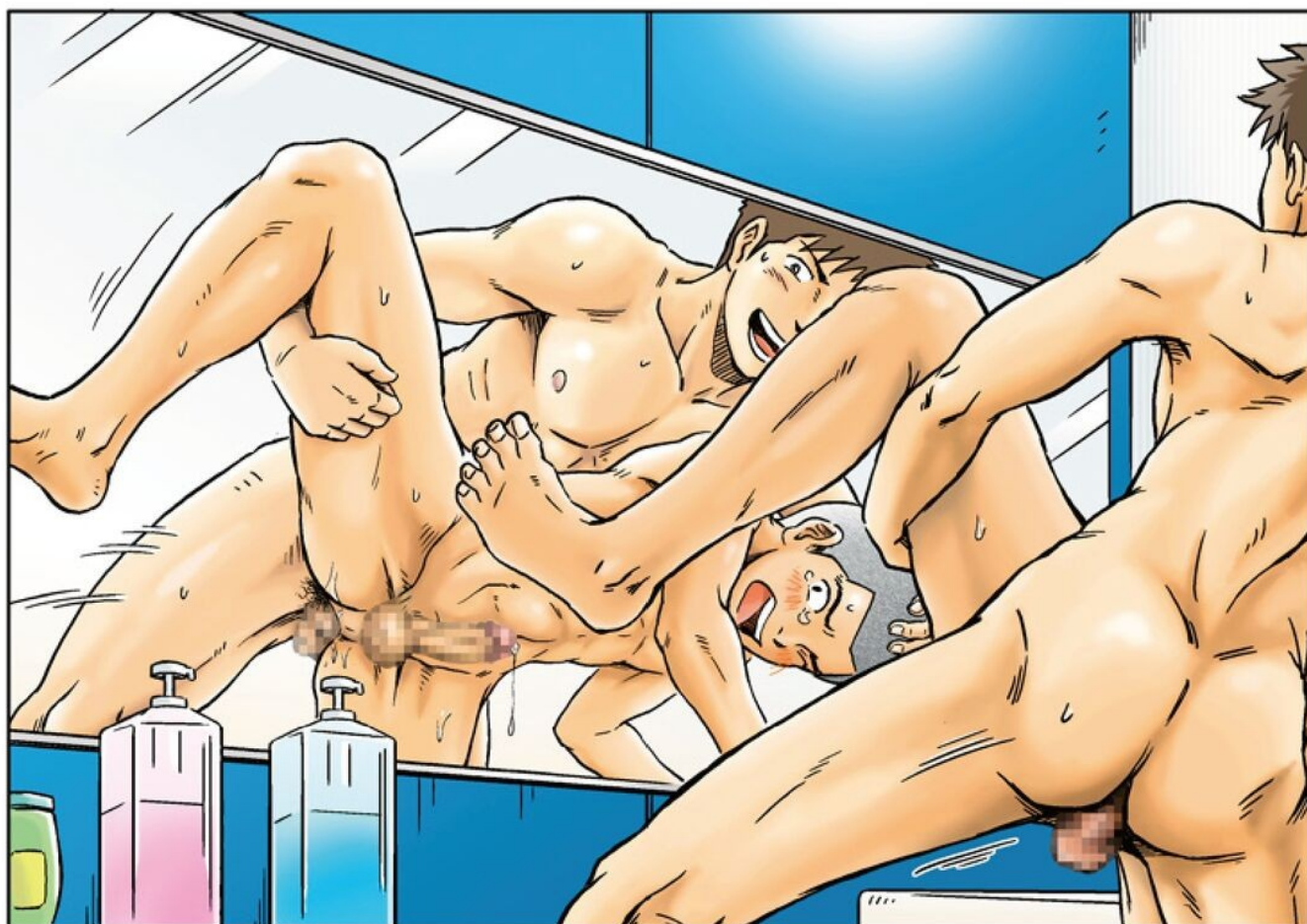
「くはっ、すっげー締まるツ!!」と恵介。

恵介は容赦なく礼一郎の亀頭を扱き上げ、さらに尻を犯し続けた。それもただのピストンでは無く、グリグリと前立腺を押し潰しながら当て掘りし、そのまま最奥まで突き上げては、礼一郎の全てを貪る。あまりの刺激に、礼一郎は半狂乱となった。

亀頭に与えられる痺れるような快感と苦痛は、当て掘りされる前立腺への刺激が加わる事で、何倍にも増幅されるのだと知った。さらには最奥にぶち当たる際の鈍い痛みすらも、どうしようもなく犯されているという被虐感を掻き立てては、この上なく礼一郎を煽り続けた。

「ほら見ろよ、ケツ犯されてんの見えるだろ？」

片脚を用を足す雄犬のように掲げられ、鏡に結合部が丸写しになる。20センチ越えのイチモツが小さな尻に全て飲みこまれ、また引きずり出されていく様は、にわかには信じられない。そして礼一郎の意思を裏切って、強



姦まがいのセックスに喜び喘ぎ、悶える自分の真実の姿がそこにあった。

「いやだああああ!!」礼一郎が絶叫する。

「嫌じゃねえよ、もつとの間違いだらッ」尚も容赦なく犯し続ける恵介。

「やだっ、もうやだあつ……もっ、もうっ、あつ、ああっ」

「もうイキたい? いいぜ、オレもそろそろ限界っぽい……っ」

“違う、イキたくなんかない!” “イカされてなるものかっ!!” 礼一郎は嫌々をするように頭を振る。だが肉体の悪魔の方は一刻の猶予も無く放出を望み、彼の中で暴れまくっていたのだ。

恵介は最期の総仕上げにかかるべく、礼一郎を抱えて連結したまま持ち上げると、バスタブの縁を跨いで馬乗りになった。二人とも片脚は湯船の底に、もう片脚は洗いの床につく形だ。

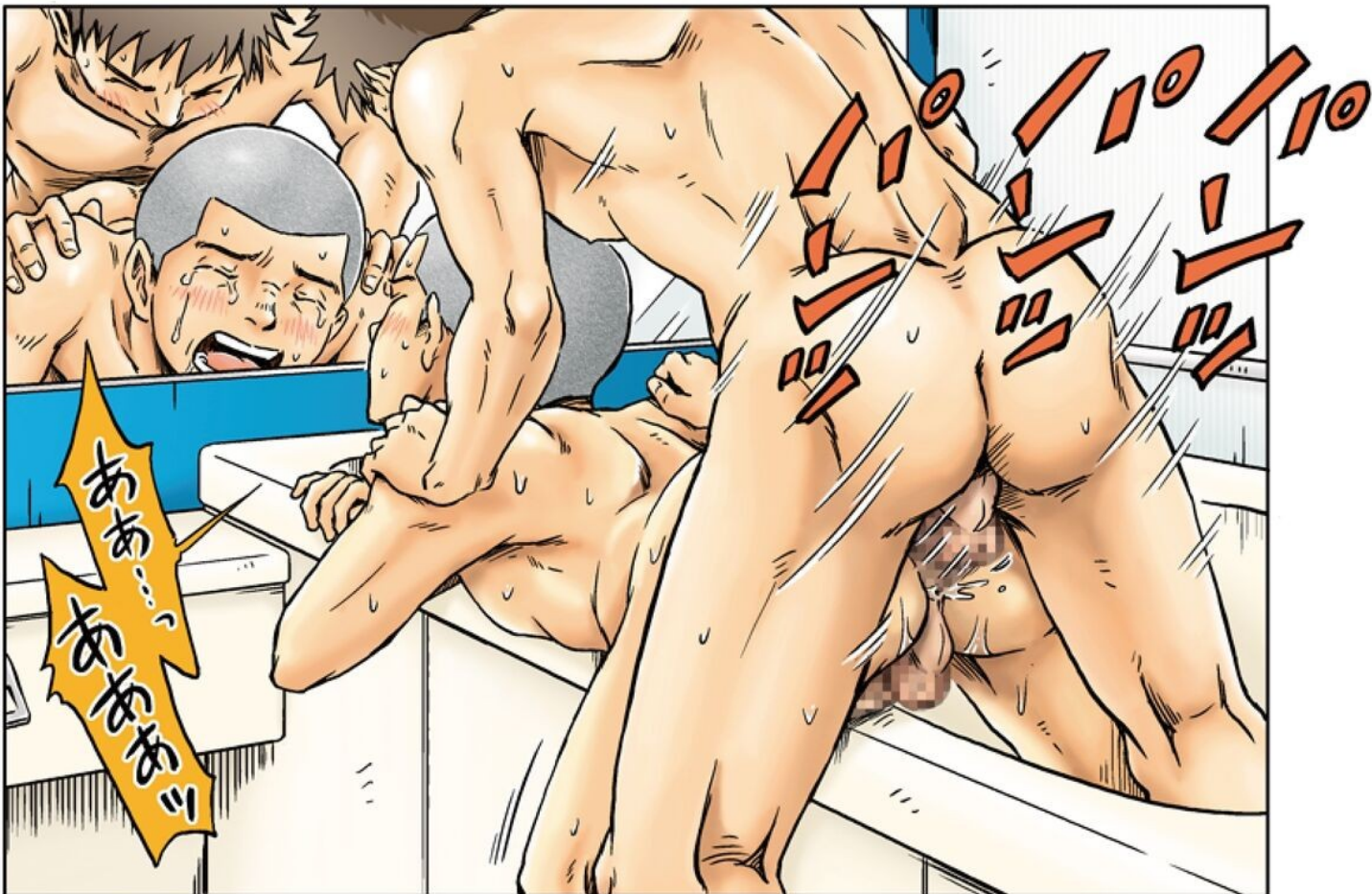
今までとは比べ物にならない激しいピストンに、礼一郎の身体が大きく揺さぶられる。力の抜けた両腕は身体を支えきれず、バスタブの縁にしがみつこうように突っ伏

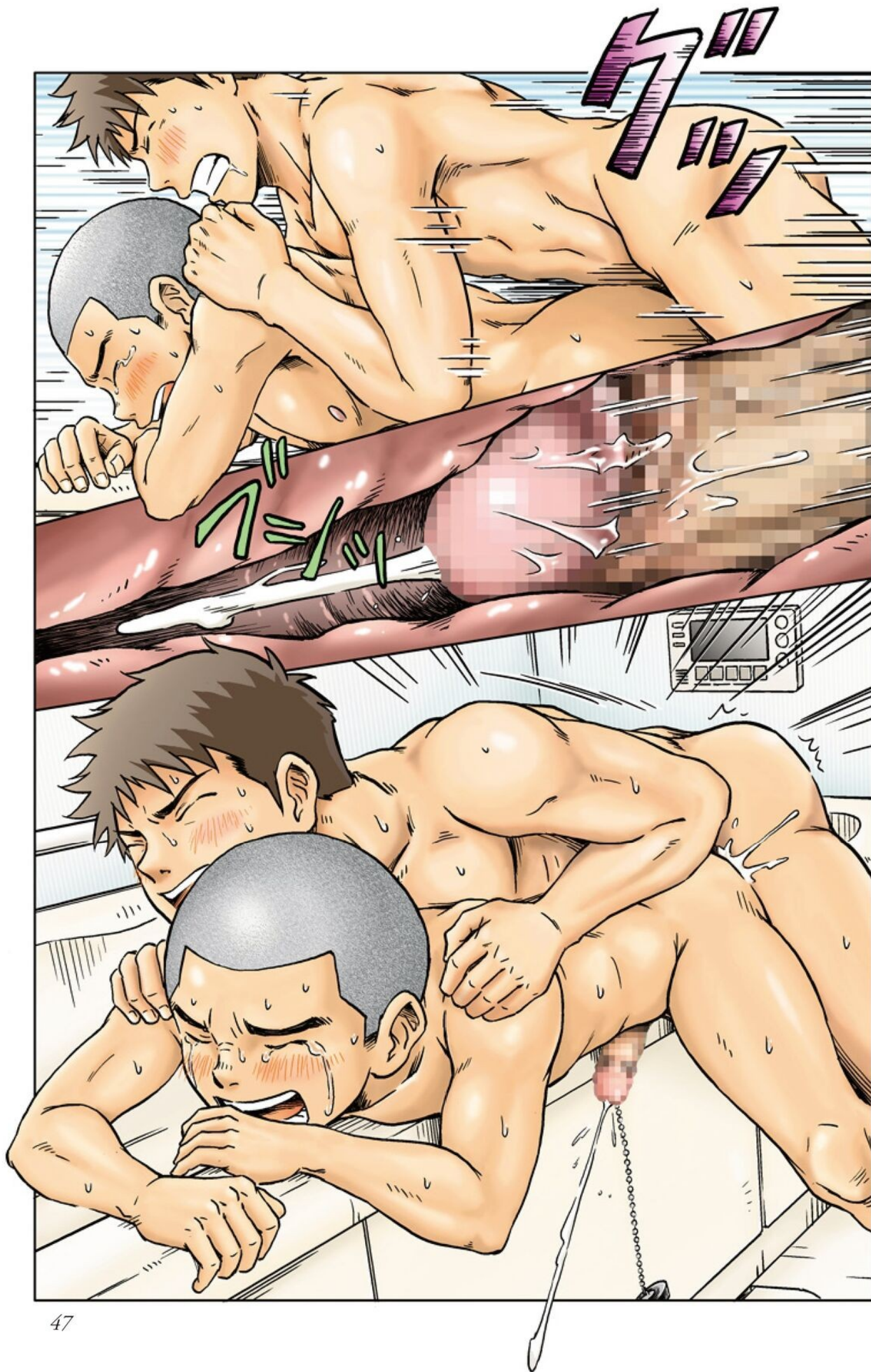
した。礼一郎の肩をがっちりホルドし、のしかかる様に打ち込む恵介。激しくぶつかり合う尻と鼠蹊部が“パンパン”と浴室に鳴り響きこだまする。鏡に間近に
対面する事となったため、礼一郎は射精間近のだらしない惚けた己の顔を間近に見る羽目となった。

「くっっ!!」

小さな叫び声と共に、渾身の力で突き入れられた恵介のチンポがビクウツと跳ねた。最奥で何かがブシツと弾け、熱いものが広がる。続いて起こる激しい律動と共に、尻をきつくプレスされたまま否応なく注ぎ込まれる恵介の奔流……抗う術なく種付けがなされてゆく。

大量の精液が溢れかえり、内部を逆流した。幾度も痙攣を繰り返す恵介の体重を背中に感じながら、礼一郎は自分が奪われていく時間に涙し、同時に湧き上った恍惚の波へと飲み込まれていった。遥か彼方で自身が弾けるのを薄れゆく意識でかろうじて捕え、その後は何もわからなくなっていた。





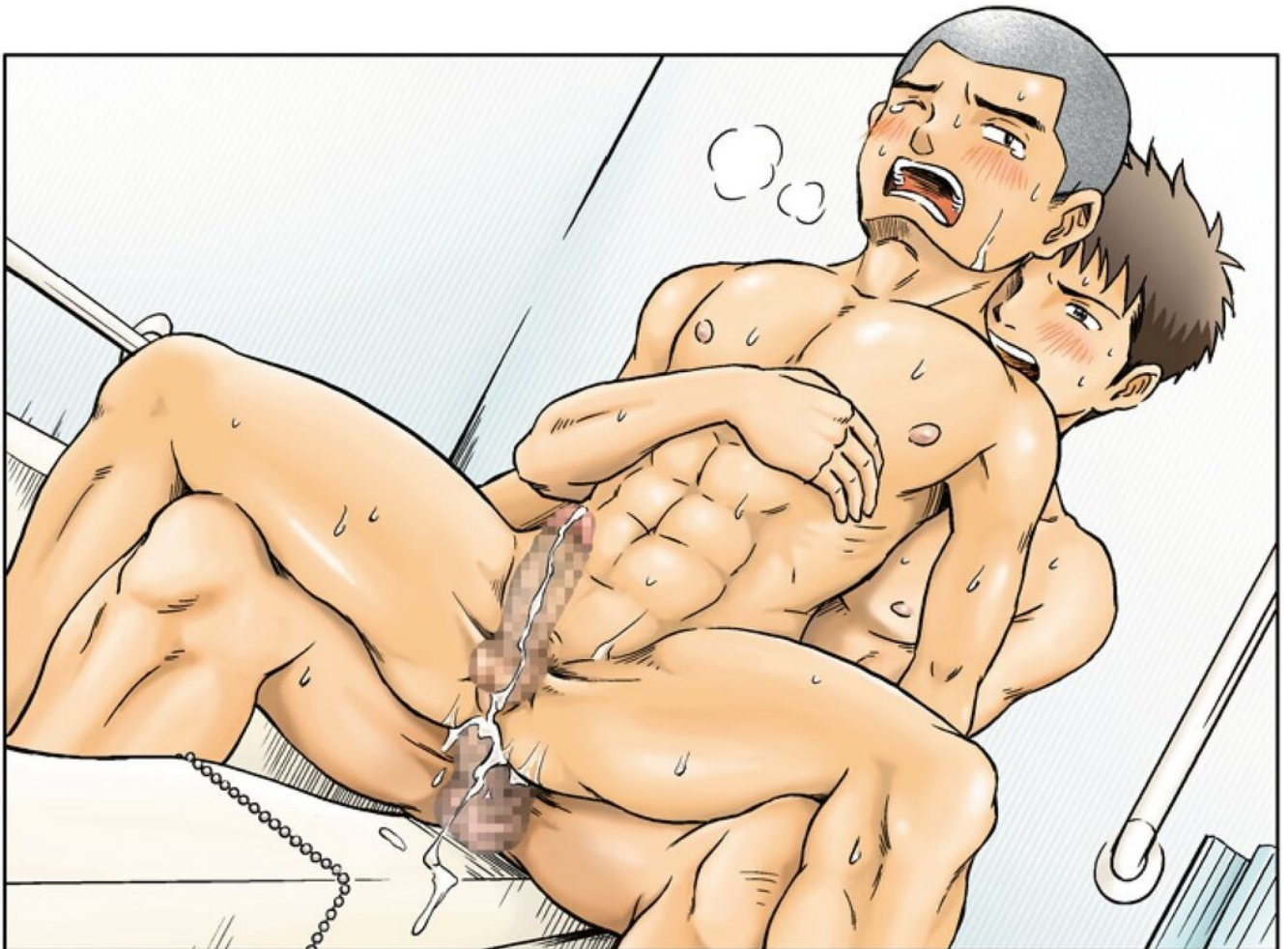
長い長い絶頂を終え、まともな意識が戻るのにしばらくかかった。荒い息を繰り返す二人の重なった肉体は、まるで一つの生物のように見える。やがてどうにか恵介が先に身体を起こすと、礼一郎の胸に腕を回して抱き上げた。

座位で繋がったままの二人が鏡に映り、事が成し終えられた事実を突きつける。礼一郎のパイパンチンポを伝う残り汁が玉から会陰部へ、そして啜え込んだ部分へと達し、尻穴から溢れ出した恵介のザーメンと混じり合っ

てこぼれた。

「……すっげえ出た……」

うわごとのような恵介のかすれ声を、礼一郎はぼんやりした頭で聞いた。恵介の精を注ぎ込まれた際の、言いようのない衝撃と恍惚がフラッシュバックして身震いする。扱かれていた訳でもない礼一郎のチンポは、直接の刺激無しに尻だけで達してしまっていた。一度に押し寄せた喪失と諦観と激しい昂揚が、礼一郎を精神だけで射精させたのだ。



そして今の礼一郎には何一つ残されていなかった。射精の満足感は元より、悲しみや敗北感すらも無く、ただカラッポの自分を抱えたまま放心するだけだった。

突然、触れられて身体が跳ねた。放出したばかりでさらに敏感になっている部分を、恵介が指で撫ぜたのだ。

「まだ勃ってる……」

激しい快樂の余韻が冷めやらぬのか、礼一郎のそこはまだ甘勃ち状態を保っていた。

「お前も二度目なのに、すげー濃い出したよな」

恵介の手には、礼一郎の放った情欲の残滓がべつとりと粘り付いていた。

「なあ、もう一回くらい出来んじゃね？ オレも何だか萎えねえんだよな……」

耳元で囁かれた恵介の言葉で、内部に居座る彼の欲望がまだ硬度を保っている事実によつと気がついた。

「や、やだよっ」

もう一度なんて冗談ではない、慌てて恵介の腕を振りほどき、立ち上がるうとした途端、膝がカクンと折れた。

まだ使い物にならない足腰に、礼一郎はもんどり打って浴室の床に転がってしまった。差し込まれていた恵介のチンポがずると排出され、一瞬カリが引つ掛かった後、内部の精液をまき散らしながらズポツと抜けた。

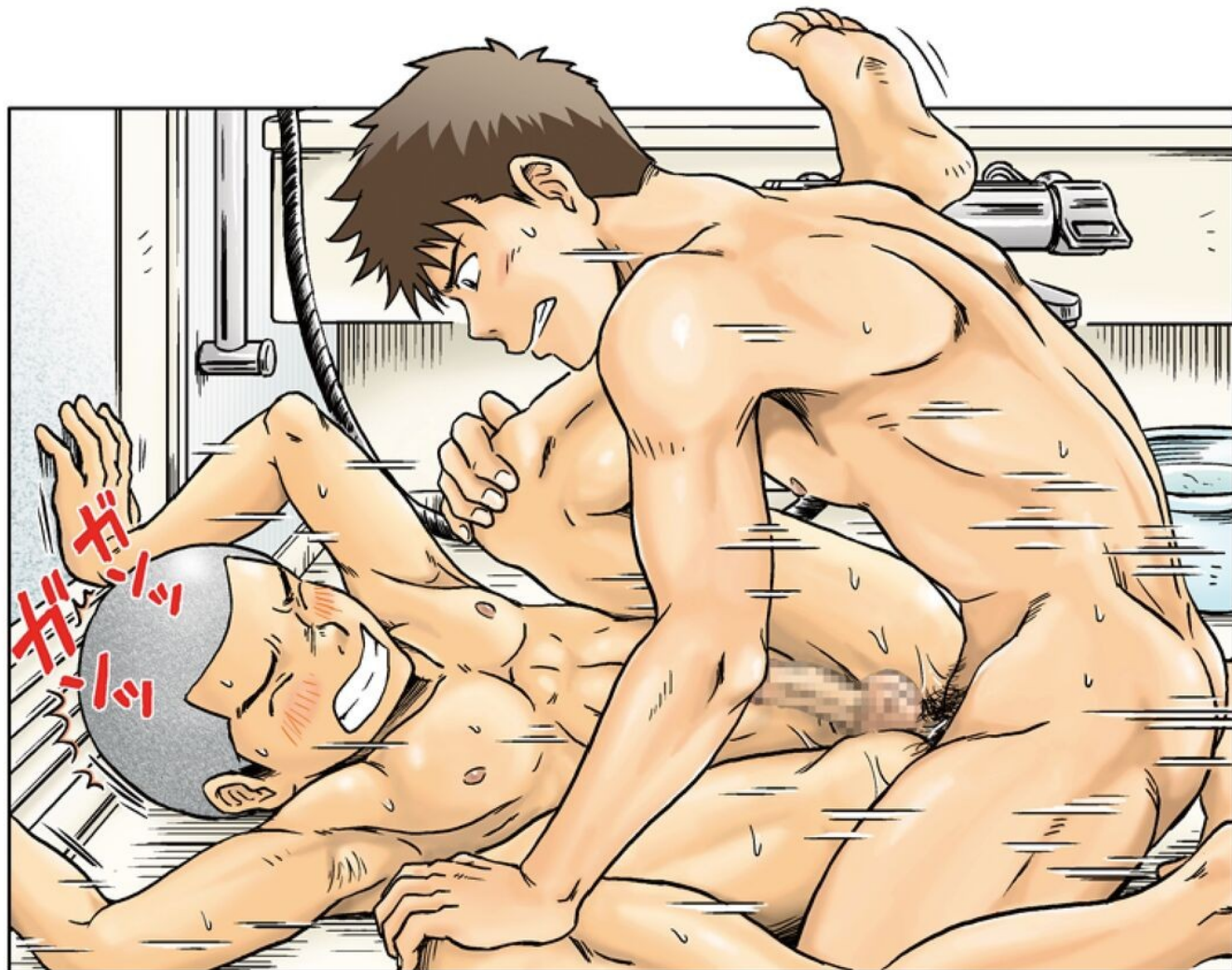
「バカ、頭打ったらどうすんだよ」

礼一郎を追って跨るように立った恵介を見上げると、逆光の中に抜き放たれた凶器のシルエットがあった。先程放出した精液を全身にぬめらせ、滴を礼一郎の身体に垂らしながら小刻みに揺れていた。

「やだっ……恵介やだよっ」

役に立たない足腰に、床を後ずさりながら礼一郎が懇願する。しかし恵介は黙ったまま礼一郎の股ぐらに屈み込むと、膝頭を掴んでぐいと脚を開かせた。女のように脚を開かされる感覚に、背筋がぞくつとなった。

チンポとアナル、二つの性器が無防備に晒されるも、一方はすぐにまた塞がれる事となった。恵介の砲口が当てがわれ、大した抵抗も無く一気に貫かれる。その事に礼一郎は愕然とした。彼の身体はもう、すっかり恵介の形に合わせて設えられてしまったのだ。



あっさり挿入を終えてしまうと、恵介は大きく腰を振って突き上げ始める。その動きに礼一郎の身体は徐々にずり上がり、ついには頭が浴室のドアに当たってゴンゴンと音を立てた。

「くそっ、風呂場じゃやっぱ狭いな」

動きを止めた恵介はそう言うと、礼一郎の背中に腕を回してグイと抱え上げた。一旦、対面座位の体位を取り、そして今度は礼一郎を抱いたまま一気に立ち上がる。駅弁スタイルで高く掲げられた礼一郎は、落下の恐怖に怯えて恵介の首にしがみついた。

「お、落ちるッ!!」

「大丈夫、大人しくちゃんと掴まってな!」

恵介は腕を礼一郎の腰に回すと、指を組んでガッチリ固定する。礼一郎も恵介の尻に脚を絡めてクロスさせた。体勢が整ったのを見て、恵介は子供をあやす様に2・3度揺すり上げる。恵介のチンポが根元まで深く嵌り込み、S字に走った鈍痛に礼一郎が喚く。

だが今はより深い結合を保つ方が優先だ。礼一郎は痛

みをこらえて脚に力を込めると、恵介との嵌め合わせをよりきつく確かなものとした。

「なあ、続きはベッドでしようぜ」

恵介はしがみついた礼一郎の耳元にそう囁くと、肘を使って器用にドアを開けた。必死で抗議する礼一郎にはまったく耳を貸さず、駅弁の体位で抱えたまま浴室を出ると二階の自室へと歩き始めた。

そして二人が通った廊下や階段には、水と汗と精液の混じり合った液体がぼたぼたと垂れ落ち、点々とその跡が残されていた。



第五章

自室へ辿り着くと、恵介は繋がったままの状態でベッドへ倒れ込んだ。衝撃で結合部が深く突き刺さり、礼一郎が悲鳴を上げる。恵介はしがみついていた礼一郎の腕を引き剥がすと、互いの指を組んで彼の頭の両脇に固定した。

ベッドの中央に正常位で組み敷かれた礼一郎は、完全に犯される側のポジションだ。だがもう抵抗する気力も無かった。決着はどうにいてしまったのだ。礼一郎は文字通りBottom……恵介の下存在に成り下がってしまったのだから。

「どうしてこんな事するんだよ……」

礼一郎が弱々しく呟いた。

「あーん？ そんなの、気持ちいいからに決まってんじゃねーか」

恵介のあつけらかなとした物言いに、礼一郎はギュウと胸が締め付けられる思いがした。そうだ、恵介にとつてこれはちよつとした好奇心、有り余る性欲を処理する

ためのアバンチュールに過ぎないのだ。

「んだよ、お前だってメチャクチャ感じてただろーが。ほらココ、たまんねえんだろ？ ケツ掘って貰えて嬉しいんじゃねーの？」

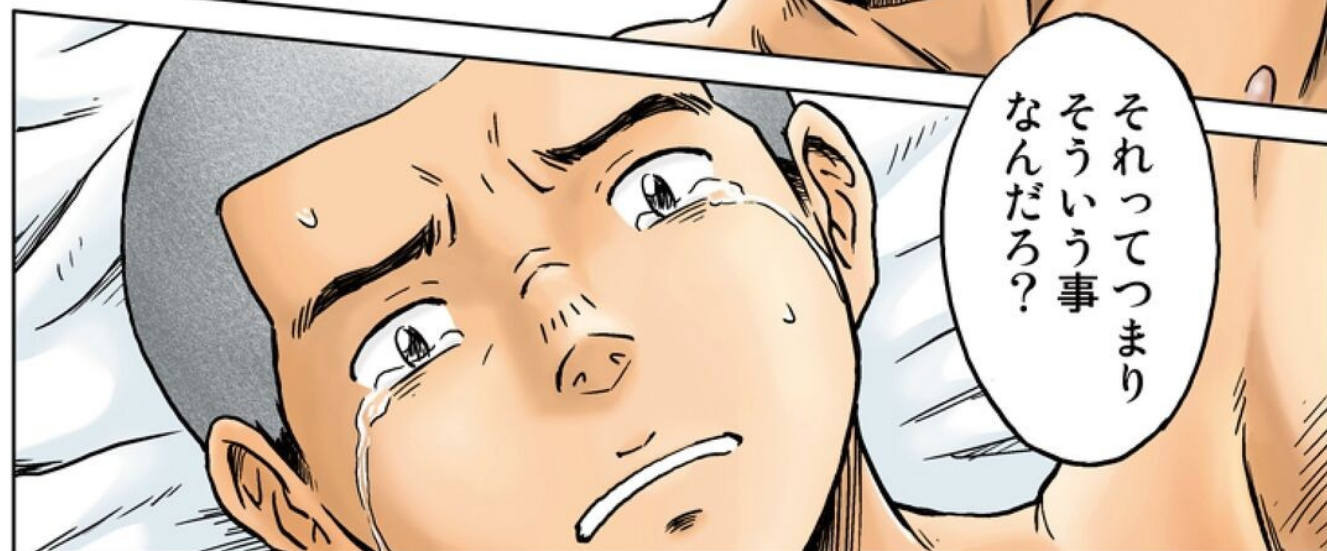
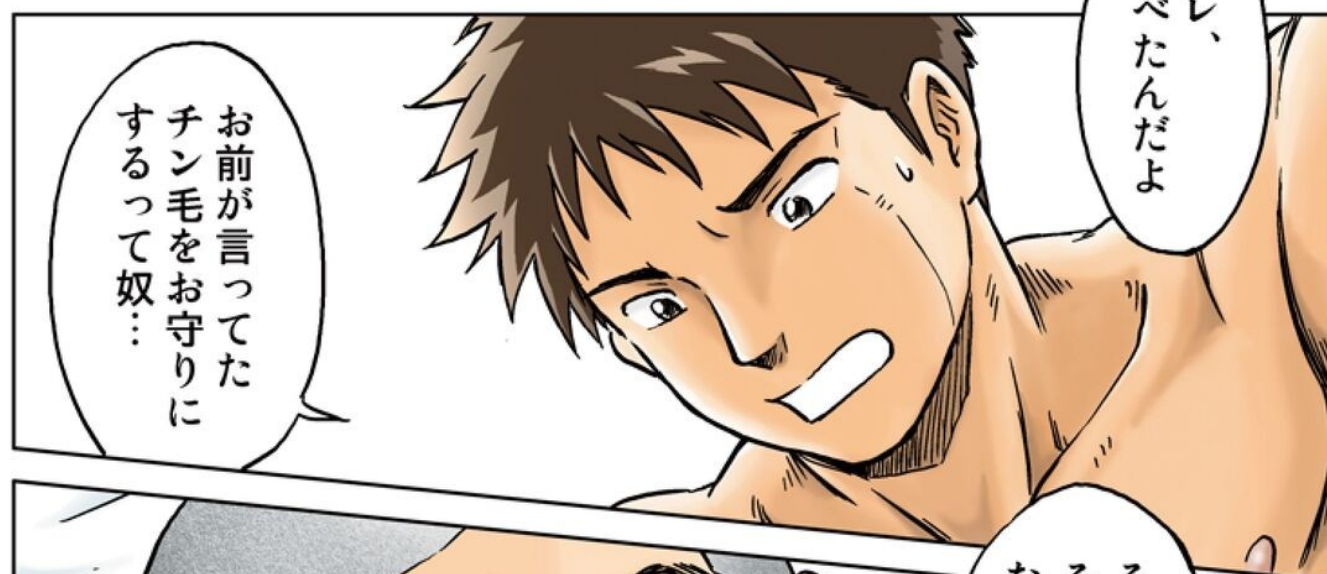
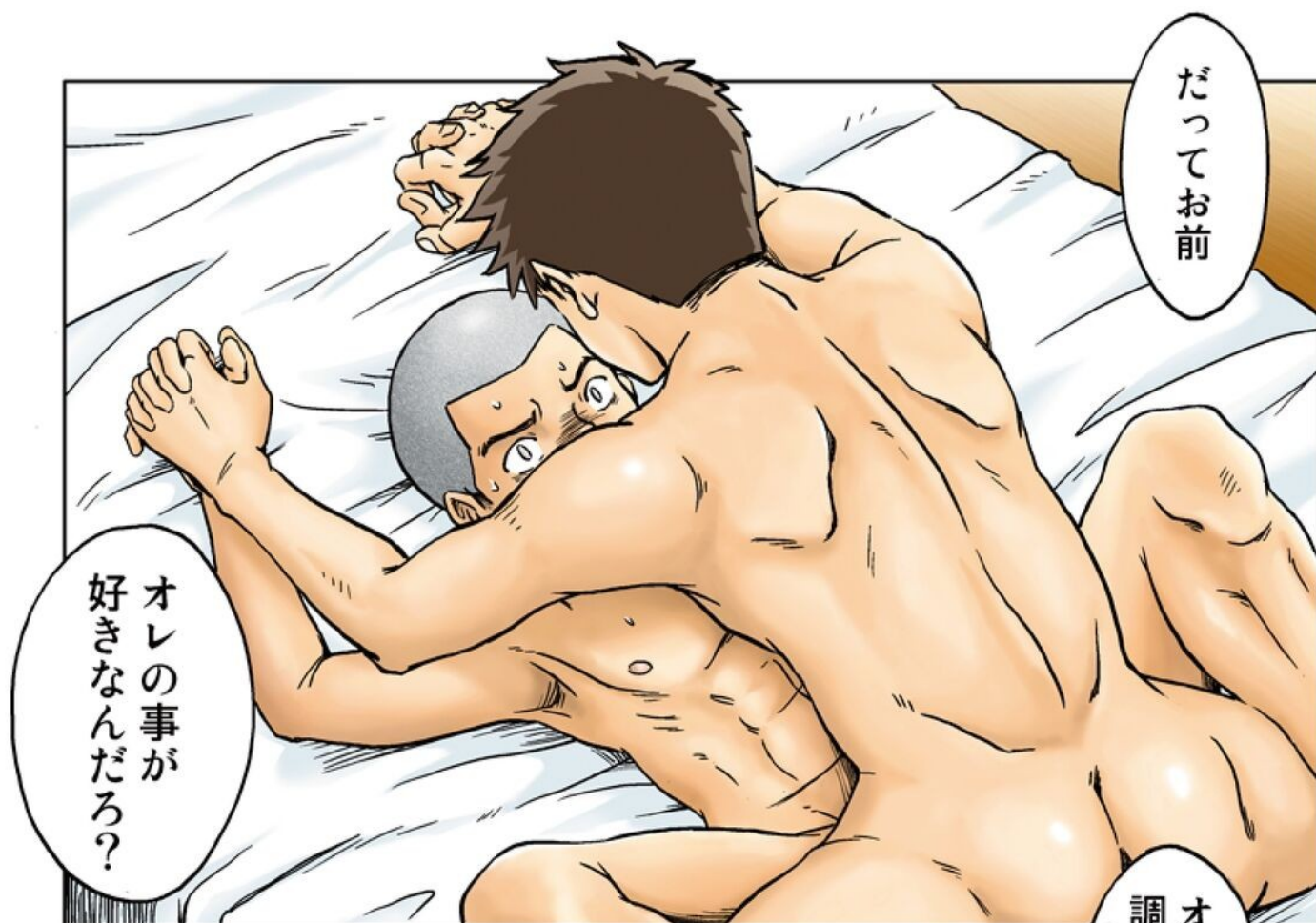
恵介がふざけ混じりに腰を揺すってくる。内部をグリグリと掻き回され、思わず反応してしまう自分の身体が恨めしい。

「んクッ……よ、よせよつ、オレは嬉しくなんかっ……」
「何で？ だつてお前、オレの事が好きなんだろ？」

一瞬、恵介が何を言ったのか理解できなかった。ぽかんとした顔で礼一郎が見上げると、恵介が咎めるような表情で見下ろしていた。

「オレ、調べたんだよ。お前が言ってた、チン毛をお守りにするってやつ……そしたらアレ、お守りにするのは恋人や奥さんの毛って書いてあったぜ。それってつまり、そういう事なんだろ？」

礼一郎の心臓がドクン！ と強く打った。激しく収縮した鼓動のせいで、心臓自体がズキンと痛んだ。とうに全てを失ったと思っていたのに、まだ失うものがあつ



た事に愕然とする。それだけは知られたくなかったのに……神様はどこまで無慈悲なのだろう。

礼一郎は瞳を閉じ、ただ嗚咽を堪え続けた。涙が溢れ、目尻から零れてシーツを濡らした。……全て知られていた。そして礼一郎の気持ちを知って尚、あんな行為に及んだ恵介の事がたまらなく悲しかった。好きだった相手を、明日からは恨まなければならぬのだろうか……そう思うと、辛くて胸が張り裂けそうだった。

突如、食いしばっていた唇に、柔らかいものが触れた。

驚いて目を見開くと、視界いっぱいには恵介の顔があった。突然の、そして初めてのキスに礼一郎は狼狽した。しばらくの間、恵介の唇は礼一郎の口を挟んだり啄むように弄んでいたが、やがてそれにも飽きたのか、舌を内部へと割り入れてきた。

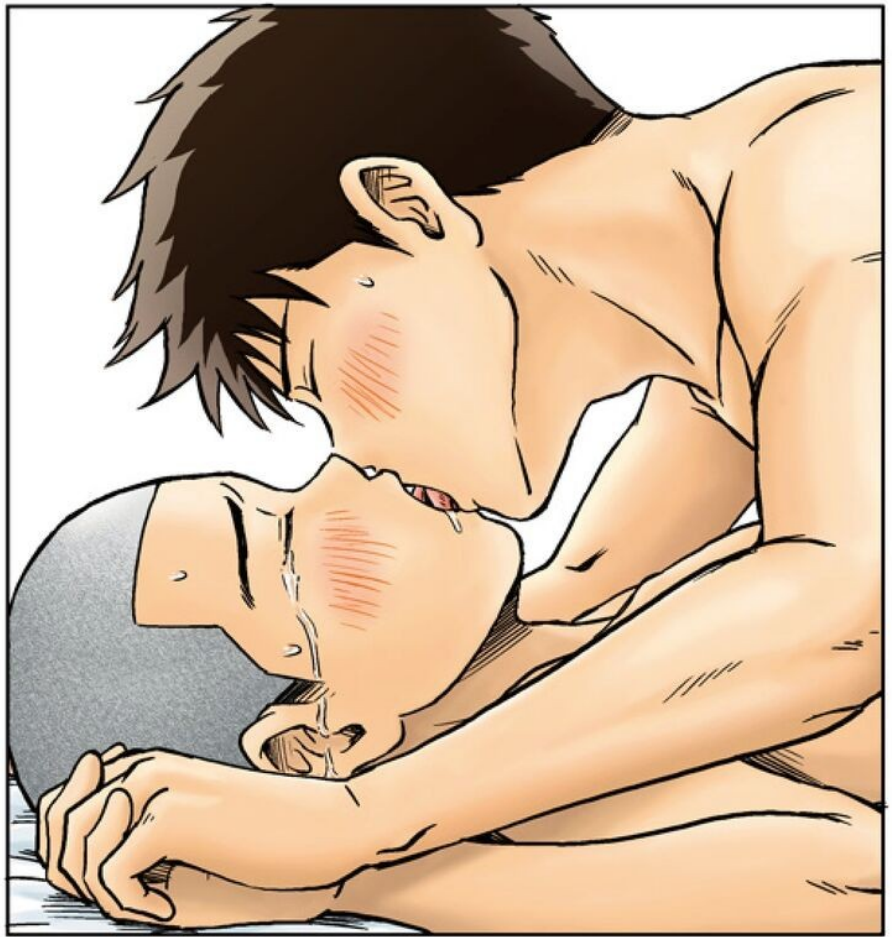
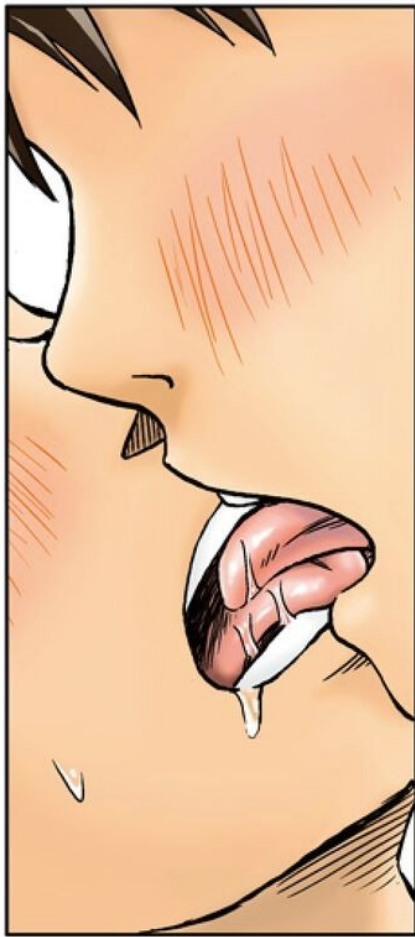
礼一郎はどうしていいのかまるで分らなかった。恵介の舌は礼一郎の歯列の辺りをウロウロしていたが、さらに奥へ進みたがっている素振りが感じられた。迷った挙句、ほんの少しだけドアを空けてみる。早速舌先が隙間

から顔を覗かせ、チロチロと奥を伺う。そのまま強引に押し入って来るのだろうと踏んでいたのだが、どうやら無理強いする気は無いらしい。

果たしてそれは礼一郎の意思だったのか……後になつて振り返ってみてもわからないままだったが、彼はおずおずと扉を開き、招き入れられた客はそつと主と触れ合つて熱い抱擁を交わした。

恵介の舌は礼一郎の口内をねつとりとねぶり、絡め取り、唾液が注ぎ込まれた。礼一郎も戸惑いながら同じ事を返す。全身がふわふわした感覚に包まれ、先程までの心のしこりが、融けて流れて去っていくような気がした。果たしてこの行為がどういう意味を持っているのか、礼一郎には皆目見当がつかなかった。そもそもキス自体が初体験で、普通のキスというものがわからなかったが、今まさに行われているそれは不思議と優しく、そして愛情に溢れているように思われた。

“もしかしたら”という希望がふいに首をもたげる。だが慌ててそれを打ち消した。下手な希望は、時に絶望をより深くする。礼一郎はうつとりと唇を合わせながら、



ただただこの時間が永遠に続いてくれと願った。口を離し、現実と向き合うのが怖かった。

だが夢の時間はやがて過ぎ、口を離れた恵介は「これでいいだろ」とぶっきらぼうに言った。そして礼一郎の両足を掴んでグイと抱え上げると、ゆっくりと挿入を再開する。

「ま、待つてよ、今のはどういう……」

礼一郎の問いを無視して、本格的に打ち込み始める恵介。礼一郎の身体もそれに反応して快楽の信号を送ってきたが、今はそれに溺れる訳にはいかない。やはりどうしても確かめなければならぬ、大切な事だった。

「ダメだって……くうっ、ちゃんと答えるよっ!!」

礼一郎が叫ぶ。恵介は黙ったまましばらく打ち込み続けたが、やがて怒ったような声でこう答えた。

「オレのチン毛は役に立たなかったけどよ、お前のは御利益あった。そういう事だよ」

どういう意味なのか、即座にはわからなかった。オレのチン毛に御利益？ 大きく揺すり上げられながら必死

に頭を巡らせる。ふと床に敷かれたままの新聞紙が視界の端に入った。その上には、バリカンで刈り取られた礼一郎のチン毛の小山。そういえばあのチン毛の所有権は今、一体誰にあるのだろうか……？

「恵介……ハッキリ言ってくれなきゃわかんねえよっ!!」

「うるせえ、もうわかってんだろッ！ それにテメエだつてちゃんと言つてねえじゃんか!!」

そこで会話を断ち切るように、恵介は激しく礼一郎を犯し始める。まるで憎んでいるかのように体重を乗せて打ち込まれるピストンに、礼一郎はたまらずアナルを締め減速を求めた。

が、次の瞬間「うぐッ」という呻き声を上げて恵介の身体が硬直する。そして礼一郎は、自分の奥にまたあの感覚が広がってゆくを感じた。

ブルブルと汗だくの肩を震わせ、額に血管を浮き上がらせて歪む、恵介のイキ顔が目の前にあった。快楽に身悶えるその表情は、いつもの余裕ぶった恵介とはまるで

別人の情けないものであった。だが不思議な事にそれは、礼一郎の瞳にはとても愛おしいものとして映ったのだった。

「くそっ、お前が変な事言い出すから、イッちまったじゃねーか……」

礼一郎に突っ伏した恵介が、大きく胸を弛緩させながら途切れ途切れに言う。礼一郎はそつと恵介の肩に腕を回し、脚を腰に絡めてきつく彼を抱きしめた。放出された恵介の精が、礼一郎の中でジンジンと熾火おきびのように冷めない熱を保ち続けている。

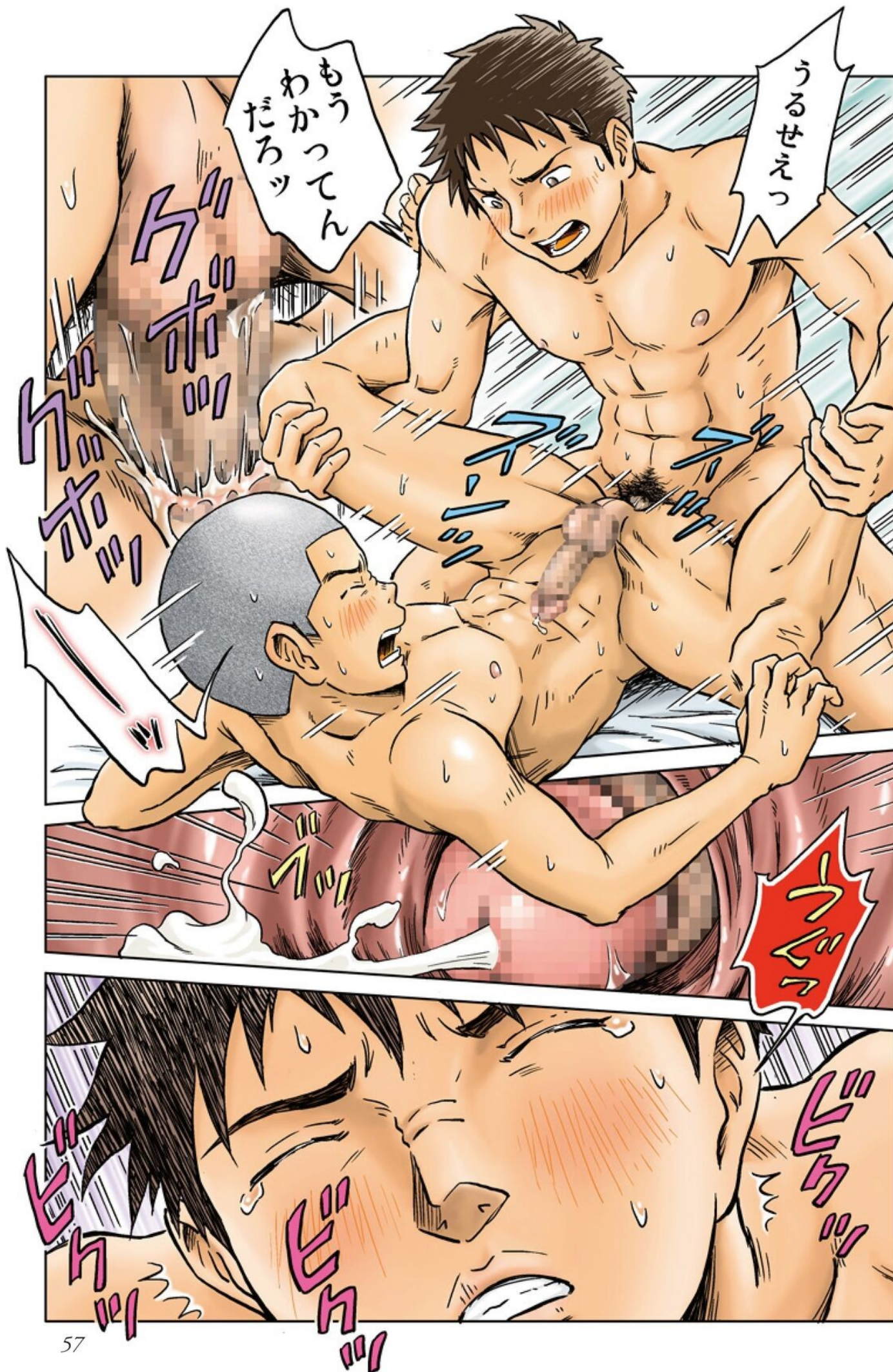
「——お前さ、オレと比べてどうのとか、もうそういうの、止めろよな」

整い切らない呼吸を挟みながら、恵介が言った。

「お前はそういうんじゃないよ。勉強とか運動とか目に見えるモンじゃなくてさ」

「え？」

「だからよつ、上手く言えねえけど、お前見てると何かこうっ……人間っていいなって思えるんだよ」



もう
わかってん
だろッ

うるせえッ

クッ
ポッ
ポッ

ズッ
ズッ

ズッ

ビッ
ビッ
ビッ

ビッ
ビッ
ビッ

ビッ
ビッ
ビッ

「何それ？ 全然わかんねえよ……」

「るっせ、お前がわかんなくても、オレはちゃんとわかってるんだからいいんだよ!!」

恵介は顔を赤らめると、ふて腐れたようにそっぽを向いてしまった。彼の言わんとする事はさっぱりだったが、礼一郎はそれでも何か、憑き物が落ちたような心持ちがした。それは少し寂しくありつつも、不思議な晴れやかさでもあった。

“もういいや” 礼一郎はそう思った。

幼い頃から憧れ続けた対象は今、幻想となって消えてしまった。いや、変質して別のものになったと言ふべきか。完璧で無敵だったはずのそれは、不完全な一人の人間として彼の腕の中にあった。それでいいと思った。完璧ではなくなった代わりに、人としてもっと愛せるだろうと思った。

もちろん、今でも彼は礼一郎の敵う相手ではない事に変わりなく、その事実になんかの悔しさは残ったが、それともう些末なことに思えた。だってこいつが自分を求め

てくれていると知った以上、どっちが上とか下とかあまり意味が無いじゃないか。恵介が礼一郎の中の何を欲したのかわからなかったが、少しでも相手に与えられるものが自分にあるというのなら、それで十分だ。

「ずっと、好きだったんだ……」

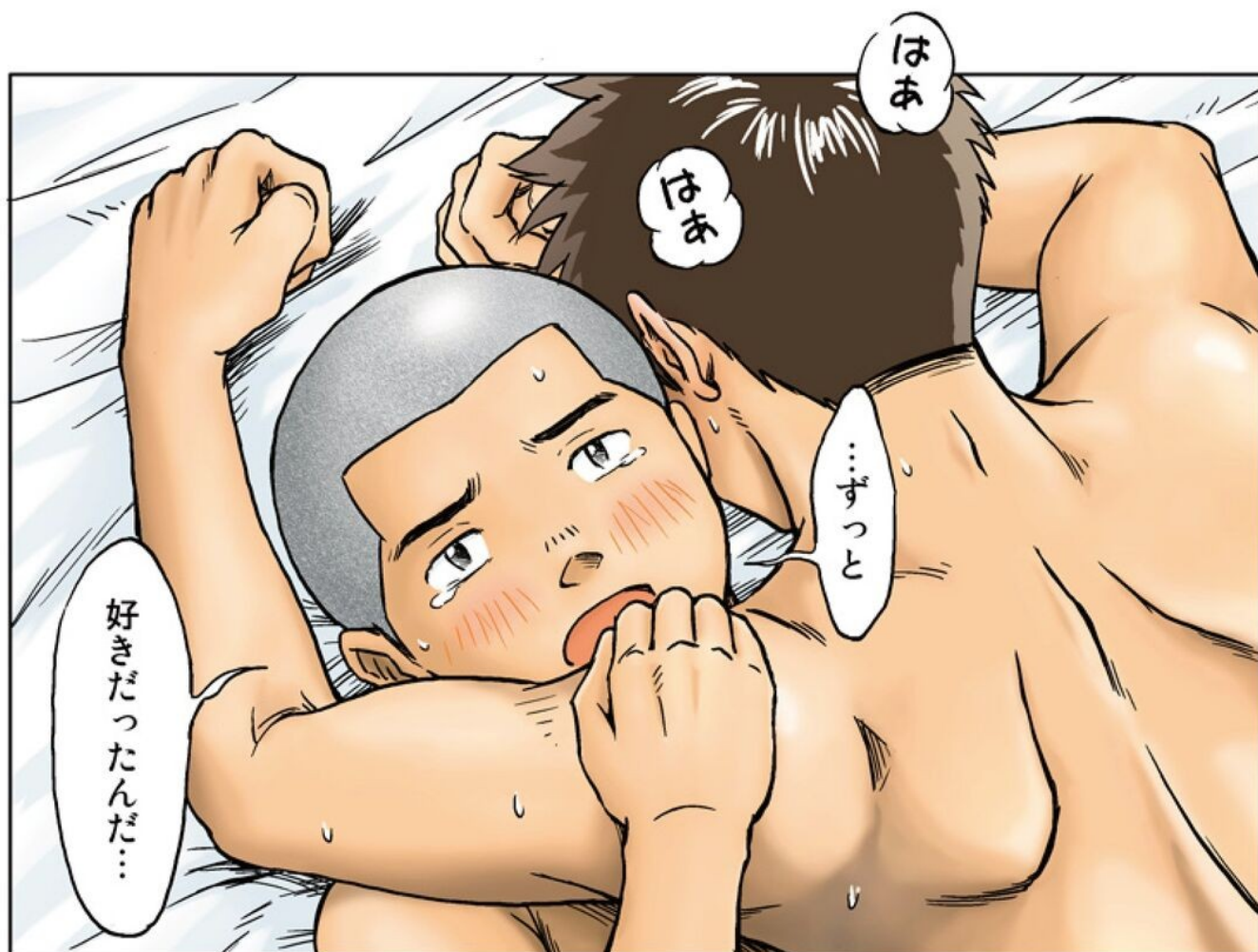
礼一郎はかすれた声で告白した。

恵介は顔を伏せたまま、ただ「うん」と一言だけ。本当はその後に続く言葉を聞きたかったのだが、恵介からそれは発せられる事無く、沈黙だけが残った。ちよつとずるいなと思ったものの、礼一郎はそれで一応満足した。恵介の気持ちは礼一郎の中にきちんと伝わったからだ。

「ねえ、恵介……」

礼一郎はそう囁いて、恵介に口づけようと顔を寄せた。先程の陶酔をまた味わいたかった。だが恵介の方はまだ素直に成り切れていなかったらしく、それを無視すると、体を起こして礼一郎のチンポをムギュツと握りしめた。「これでお互いに発射つたよな。まだまだこんなもんじゃ済まさねーぞ!!」そう言っただけでまた腰を振り始める。

「えっ、お前、今イッたばっかで……」



礼一郎が泡を食って悶える。恵介の主砲はまったく戦闘力を失っていないかった。

「オレの連続射精記録は8回なんだぜ、死ぬ程でめえ泣かすから覚悟しろ!!」

「ちよつ、待つ……、んああああーっ」

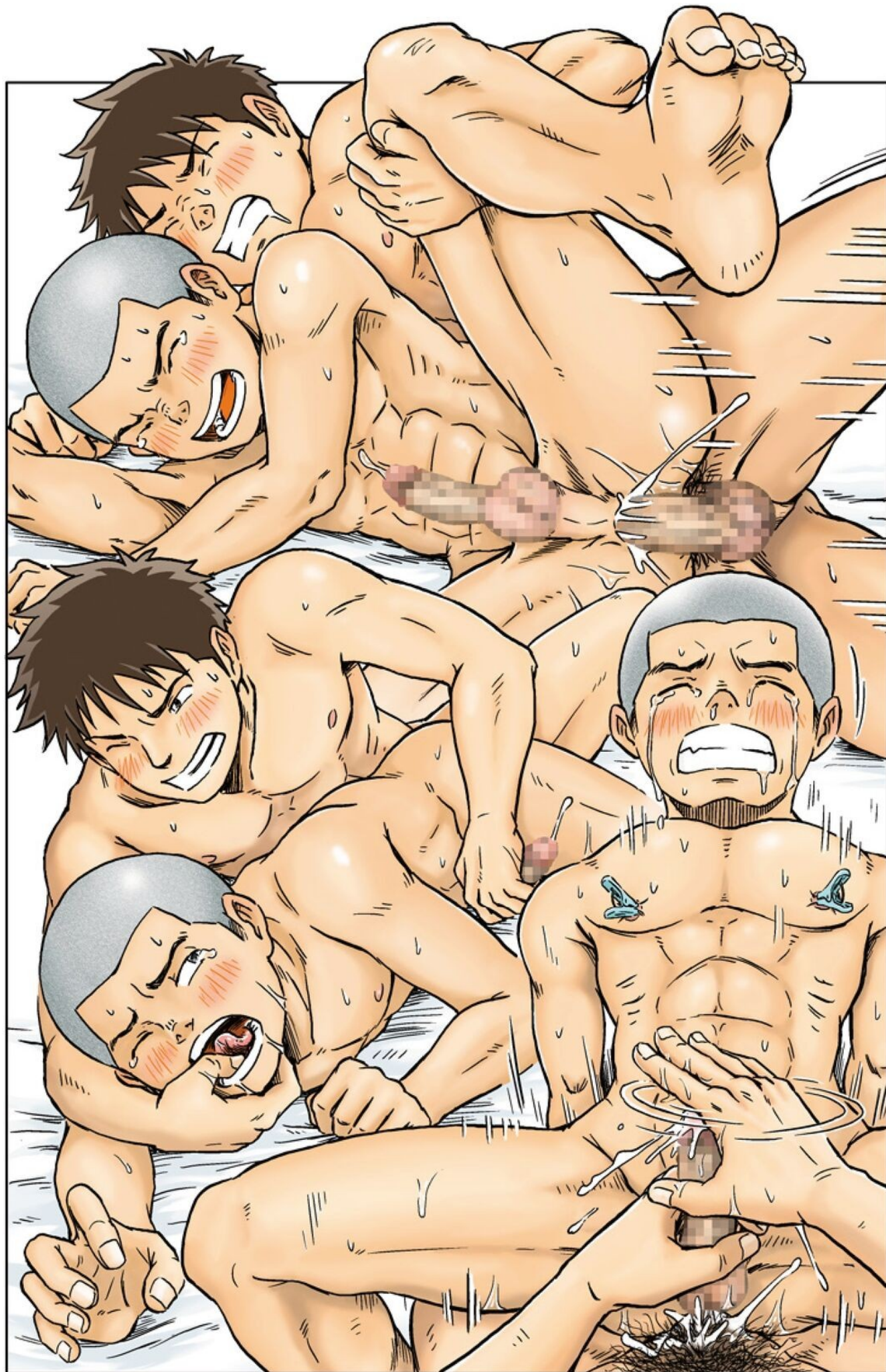
再び始まった恵介の攻撃ターンに、礼一郎の悲鳴が響き渡り、その後は淫らな音の数々と、それを掻き消す程の嬌声が部屋の中を埋め尽くしていった。



もう、どれくらい犯され続けているのかわからない。窓から差し込む陽の光がオレンジ色に変わり、まぐわい合う二匹の若いケモノの肌を炎の色に染め上げた。

恵介は、性に関して知り得る知識を全て試そうとでもいうように、様々な体位で礼一郎を蹂躪した。性器のみならず、彼の全身をくまなく調べ上げ、まだ未開発であった彼の部分——乳首や脇、果ては足の指までも、性感帯へと作り変えていった。

また、礼一郎のMっ気を発見するやいなや、多少痛み



を伴う責め苦や、恥ずかしい卑猥な数々の言葉を口にさせ、彼の自尊心を引き裂いていった。かと思えば、時には優しくその身体を抱き寄せ、その全てを愛おしく慈しむように包み込むのだった。

そして先の宣言通り、恵介はさらに6発もの種を放ち、礼一郎のそこはずるずるで蕩けきった穴へと変えられてしまっていた。常人とは桁違いの造精力を持っているのだろうか、尋常でない量を注ぎ込まれた礼一郎の穴は事あるごとに溢れた精をこぼしてしまい、シーツに垂れてはあちこちに卑猥な染みを作った。

礼一郎の方はというと、あれからさらに3度達して、精液も薄透明のさらさらの液体に変わりつつあった。量や回数では恵介には及ばないものの、代わりにドライでの絶頂を会得して幾度もその身を痙攣させた。

礼一郎にとってそれは恐怖の時間でもあった。射精に伴う際のそれとは違い、ドライでのエクスタシーは恐ろしい程の絶頂感を長時間味わわれるのだ。自分が壊れてしまうのではないかと思う程にそれは礼一郎を狂わせ、消耗させていった。やがて意識は飛び飛びになり、

ただ刺激に反応するだけの魂のない肉塊へと何度も墮とされる羽目と成った。



「おいライチ、しっかりしろ！」

開発されたばかりの乳首をギューと抓り上げられ、「ヒィッ」という叫び声と共に飛び上がる礼一郎。

「……お、オレのえっちな穴にもっと注いでくださいっ」枯れてしまった声でうわ言のように叫んだ。

「バカ、それはもういいからよ」恵介の苦笑いが肩越しに聞こえた。

朦朧としていた意識が徐々に戻ってくると、とてもじゃないが人様には言えない、これまでの痴態の数々を思い出して赤面した。気付くと尻にはまだ恵介のモノが挟まったまま。どうやら意識が飛んでいた間も、ずっと犯され続けていたらしい。恵介はチンポをずりと引き抜くと、礼一郎を仰向けに転がして壁の時計を見ながらこう言った。

「これで最後だからな、もうじき親が帰ってきちゃうし」

やっと解放されるのだという思いと、とうとう初体験の時間が終わってしまう一抹の寂しさが交錯した。まだまだ繋がっていたい気持ちはあったのだが、既に身体の方が限界だった。気力も精力も尽きかけ、酷使されたアナハはとつくに擦り切れてひりひりと痛んだ。

「ね、恵介……」

「ん？」

「最後はチューしながらイかせて……」

正気の状態なら絶対に言えないだろうこんなお願いも、今なら素直に口にする事ができる。恵介は「ん」とだけ発すると、礼一郎の両脚を大きく開かせた。

どれだけ絶倫なのだろう、変わらぬ硬さを保った恵介のチンポが当てがわれる。爛れてふっくりとふくれた菊花を亀頭が押し広げ、そのまま遠慮なくずぶずぶと本体が続く。再び貫かれ、礼一郎は「んぐっ」と息を飲んだ。例えこの先何百回・何千回と犯されようと、恵介の持つこの質量に慣れる日が来るとは思えなかった。

本日最後の行為が開始される。恵介は礼一郎の尻を股

ぐらに抱え上げ、下から掬い上げる様に当て掘りしてきた。的確にヒットし続ける連打に礼一郎の腰は浮き上がり、のけ反りながら快楽と苦悶を食った。ジリジリと追いつめられる切迫感が下半身を襲う。つま先の感覚がなくなり、礼一郎は怯えた。

「ま、またイキそう……っ」

「イクって、前か？ それとも後ろ？」

「ンンン……」

恵介の問いに答える前に、礼一郎は海老反りになって激しく痙攣した。歯を食いしばり、白目を剥いたケツイキ顔はちよつとグロい。礼一郎は反らせた身体をブルブルと震わせながら、強大なドライ・オルガスムスが早く通り過ぎてくれるのをただ待ち続けた。

その最中に、突然きつく握られた。礼一郎はカッと目を見開き、今はダメだと頭を振った。だが恵介は礼一郎の懇願を無視して激しく彼を扱き上げ、さらにピストンを強くして彼の二つの性器を同時に責めたてた。礼一郎は半狂乱になり、身をよじつてもがいたが、恵介にがちりと拘束されてはどうする事も出来なかった。



ついに感極まったチンポが破裂したような感覚があり、薄黄色の液体が盛大に噴き上げた。小便の噴水は容赦なく礼一郎の身体に降りかかり、シーツに流れて辺りをびしょびしょに濡らした。それでも恵介は構うことなく礼一郎を追いたて、攻撃の手を緩める事は無かった。膀胱内の小便を全て排出し終えて、なおも続く拷問に、礼一郎の身体は他に放出可能なものが無いかと探し回った。ドライ・オルガスムスの波も留まることなく押し寄せ続け、礼一郎は本気で自分が死ぬのではないかと恐怖し、そしてそうなのでもいいような気すらした。

礼一郎が彼岸へ渡りかけていたその時、恵介は彼の両脚を肩に担ぐと“くの字”に折り曲げて顔を寄せた。先の約束通り、噛み付くように礼一郎の上の口を塞いで舌を突き入れる。そのままナメクジの交尾のように舌をきつく絡み合わせると、下の口へは大きくグラインドさせた腰を振り下ろした。

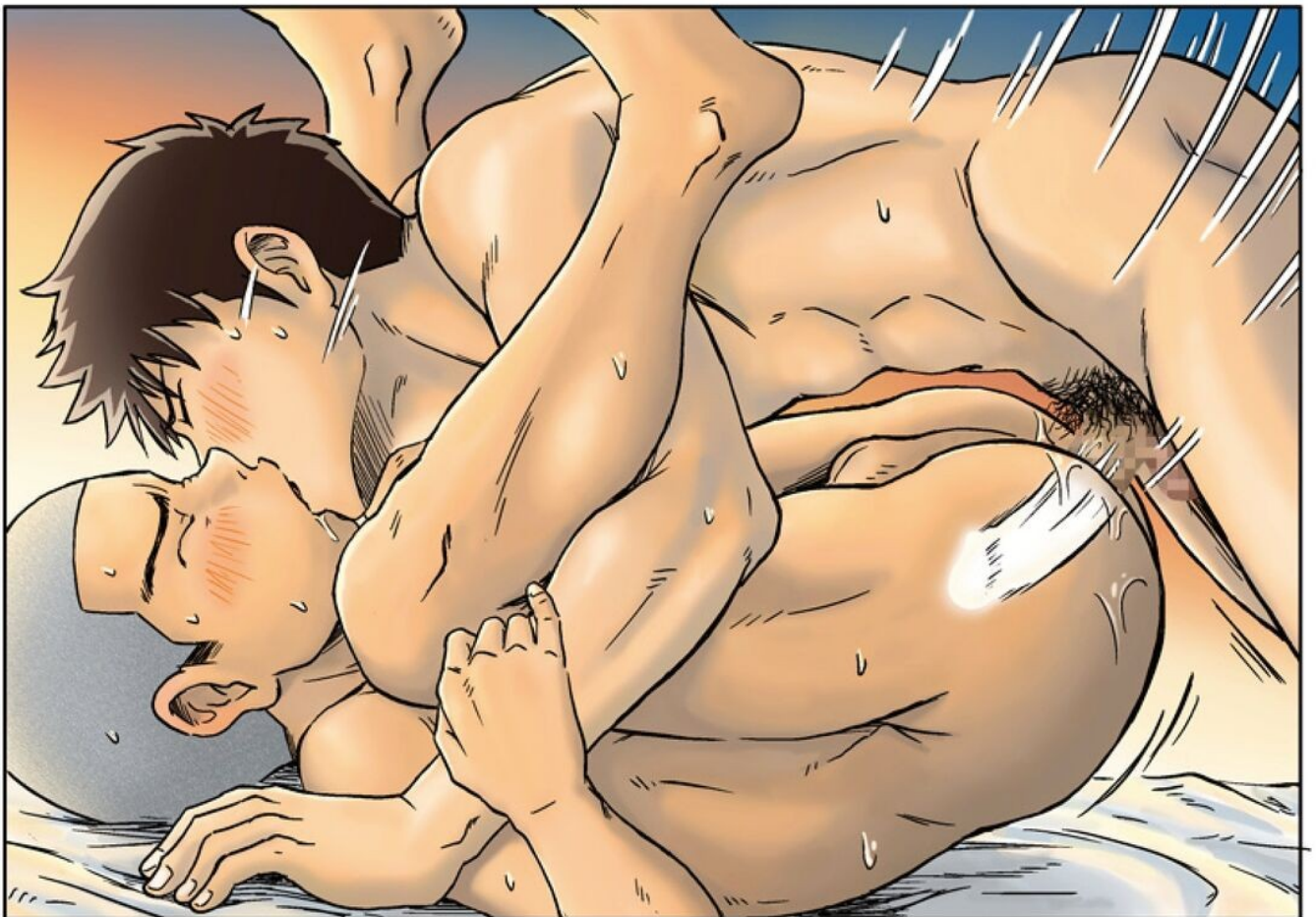
激しく肉のぶつかり合う裂音と、上下の口から発せられる粘着質の卑猥な音が部屋中に充満した。だが当の本

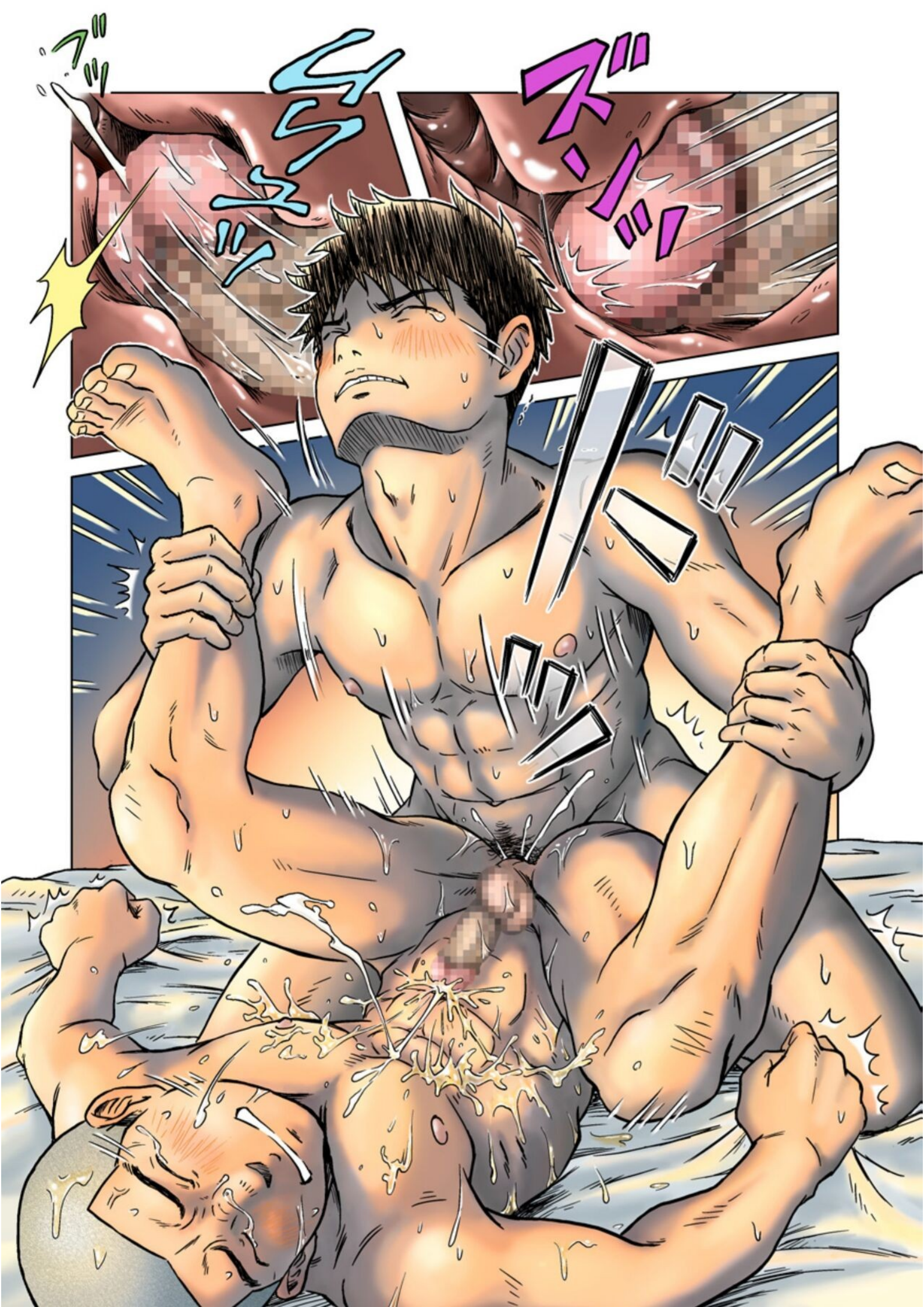
人達の耳にはそんなものは届いてはいなかった。二人の意識はとつくに遠く飛び去っていたからだ。そしてカタルシスは突然に訪れた。

渾身の力で打ち込まれた恵介の一撃は、礼一郎のS字結腸を越えて禁断のその奥へ亀頭を導いたのだ。当然、相当な痛みを受けたはずの礼一郎だったが、彼の脳は脳内麻薬に溺れていて痛みを感じる余裕など無かった。

そしてS字のきつい輪が恵介にとどめを刺す事となった。禁を犯した代償として、彼の先端はひと撫ぜであつけなく陥落させられ、残された最後の一滴まで強制的に搾り取られるシーケンスに突入した。

恵介が絶頂の律動に狂い、酔い痴れたのと同時に、礼一郎の内部も激しい収縮を引き起こした。恵介を肉壁で圧迫して精を吐き出す手助けをすると共に、自らの腹圧を上げる事でどうにかかき集めた液体——おそらくは残尿となけなしの精液の混ざった何か——がようやく弾倉に装填された。そしてそれは礼一郎の意識を白い爆発に包みながら、最期の疼きを解き放つていった。







長い長い時間、二人は絡まり合ったまま動く事が出来なかった。ぐしょぐしょのベッドの海に抜け殻と化したその身を任せ、いつか時が体力を取り戻してくれるのを待つより他なかった。ようやく辺りを伺う事が出来た頃にはすっかり陽は落ちて、部屋はコバルトブルーの静寂に包まれていた。

二人はどうか生き延びた遭難者のように向かい合い、そつと額を合わせた。何か言葉を交わすべきか迷ったが、今はそれは必要無いように思われた。本来ならば口づけを交わしたい所だったが、体中に蓄積されただるさと、まだ整わない呼吸がそれを許さなかった。

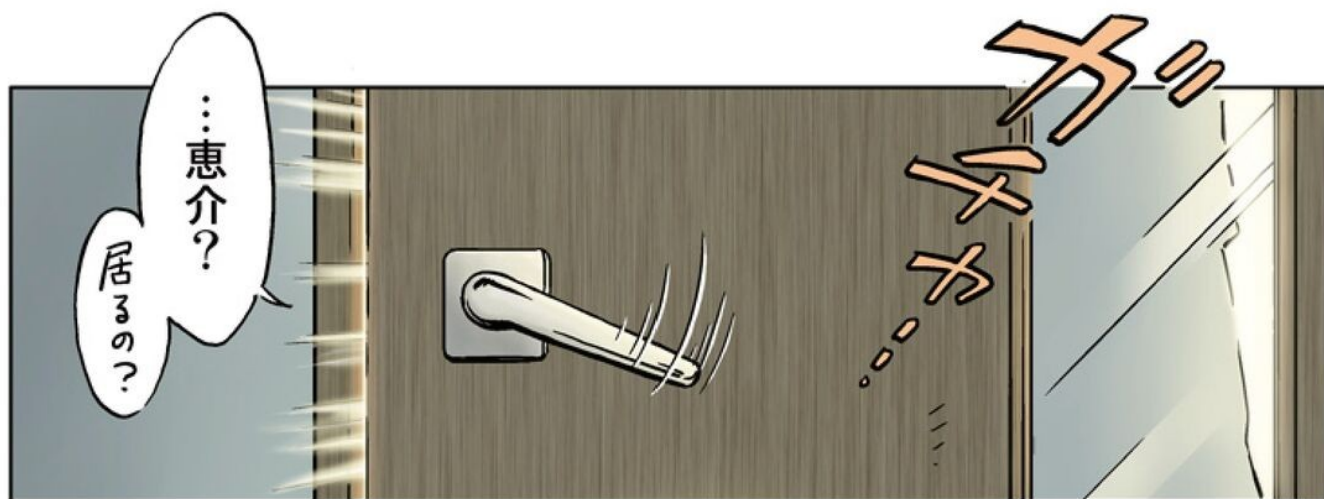
その時、階下でボタンという音がした。恵介の顔色がさつと青ざめ、慌てて立ち上がろうとしたがよろけて礼一郎の上に落下した。潰された礼一郎が「ぐえっ」とカエルのような呻き声をあげる。その礼一郎も切迫した事態を察して、必死に起き上がろうともがいたが、その身

体は恵介以上にいう事をきかなかった。

階段を上る足音が近づいてくる。＂ダメだ、もう間に合わない……＂ 最期の刻を悟り、力を失った恵介の腕がだらりと落ちる。

「恵介、居るの？ 廊下がビショビショなんだけど、あんた何か知らない……」

ドアノブがガチャリと回り、ゆつくりとドアが開いてゆく。そして部屋に足を踏み入れた恵介の母は、自分が産み落としたままの姿で絡まり合った息子とその恋人とに、予期せぬ対面を果たす事となった。



エピローグ

「——なあ、そっちの方はどんな具合よ」

「ん……まあ少しは落ち着いたかな」

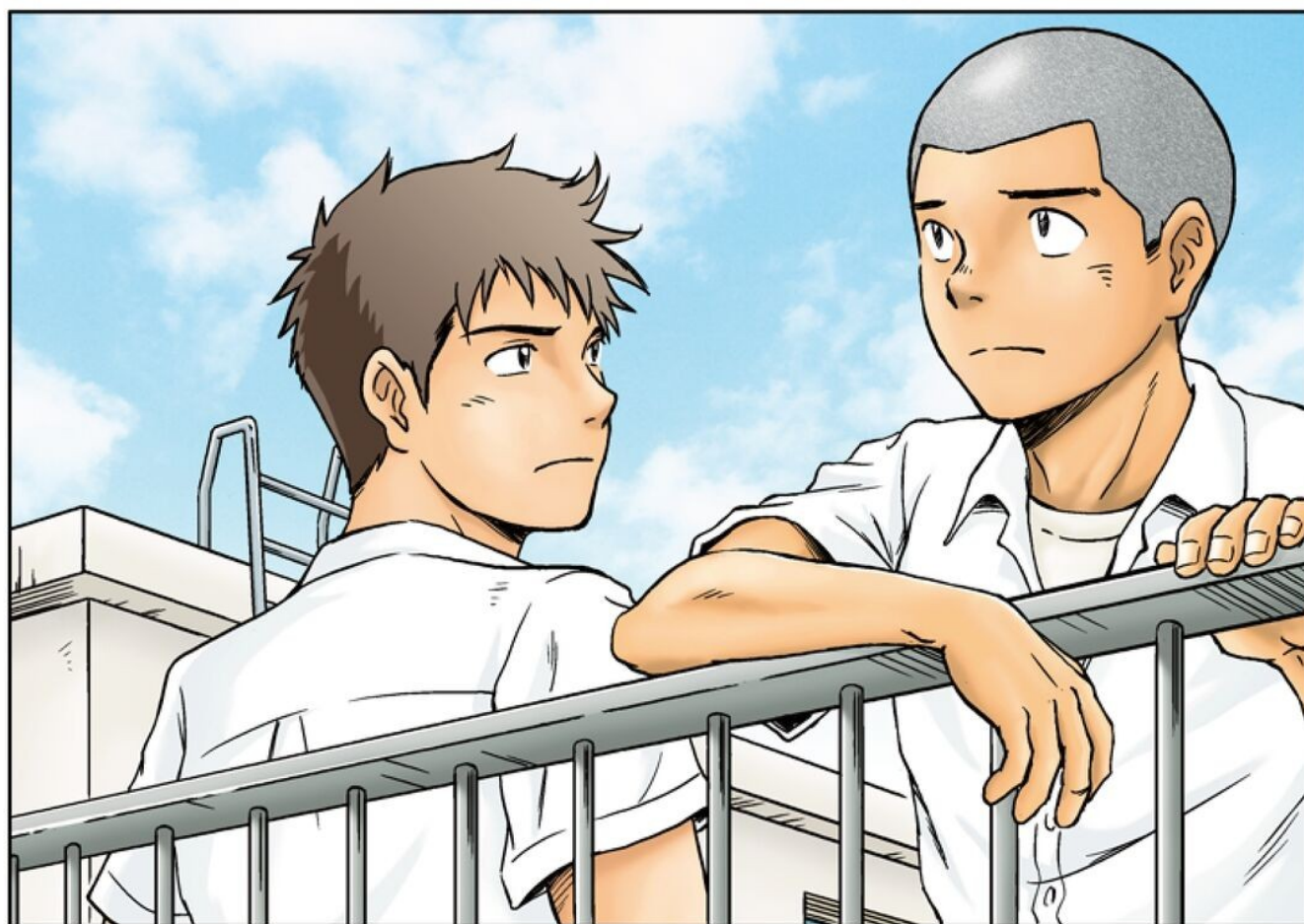
昼休み、購買で買ったパンを屋上で頬張りながら、恵介と礼一郎が話している。あの日、二人の初体験は親バレのおまけ付きで幕を閉じた。それからの一週間、両家には当然それなりの混乱と動揺はあった。

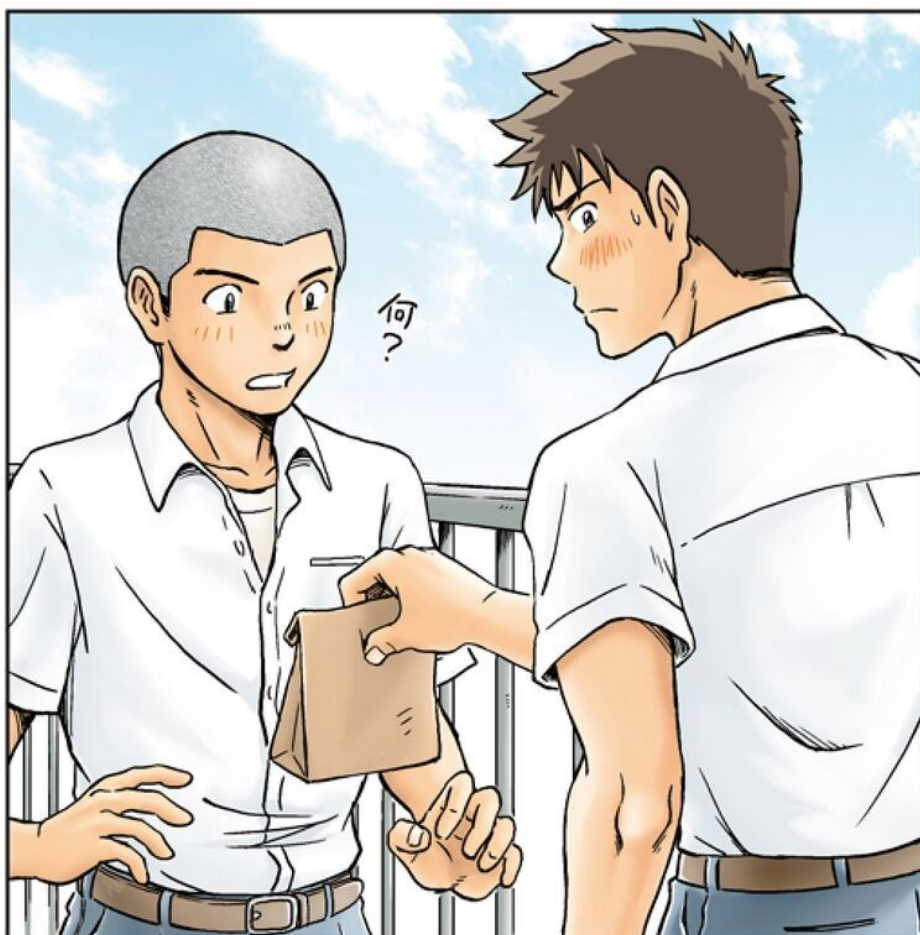
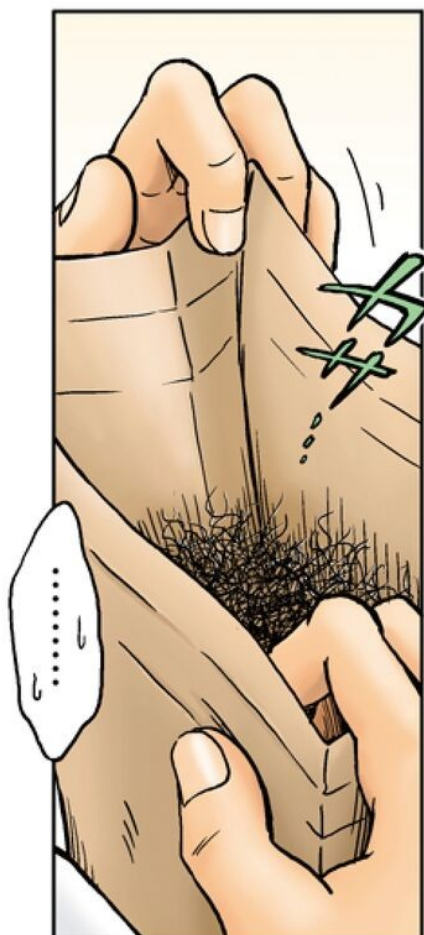
それでも双方の両親の反応は、当人たちの予想より大分マシなものだったと言えるだろう。今もまだ、母親達は息子の将来の苦労を思っただけ涙ぐむ事があったし、父親達も以前より幾分無口になってしまっただけだったが、最終的には二人の気持ちを尊重し、どうにか受け入れてくれたのだった。

「オレ達が幸せなら、それでいいってさ」

「ウン……」

二人で見上げた空はどこまでも青く広がっていた。





「あ、そうだ」

礼一郎が話題を変えようと切り出した。

「オレさ、野球部のレギュラー、決まったよ」

「マジで？」 恵介が身を乗り出して礼一郎を見つめた。

「最後の打席……ヒットにはならなかったけど、監督が認めてくれたみたい」

「ハハッ、やったじゃん!!」

恵介が礼一郎の背中をバンツと叩いて祝福した。

「——そっか、じゃあこれはもう要らねえかな」

恵介がポケットからもぞもぞと紙袋を取り出す。

「何？」

「んー、まあいいや、一応お前にやっとくわ」 思い直した恵介が袋を押し付けて寄越す。

何が入っているのだろうと袋の口を開いて覗きこんでみると、中にはもじやもじやした黒い塊が納められていた。

「これって……あの時バリカンで刈ったオレのチン毛？」

怪訝そうな顔で礼一郎が尋ねる。

「バーカ、自分のじゃお守りにならねえだろ？ 御利益

があるかどうか自信ねーけどさ、とりあえずありったけの運、入れといたから」

ぶつきらぼうに言い放った恵介の顔を、礼一郎がまじまじと見つめ、やがてその視線は股間付近へと降りていった。

「恵介、お前まさか……」

「うるせえ、いずれわかるんだから何も言うな！」

照れ隠しにプイと横を向いてしまう恵介であった。

礼一郎はプツと吹き出した後、ふいに真顔に戻ると大事そうに袋を胸に押し当て、目を閉じてそれを抱きしめた。その様子を見た恵介は、さらに照れ臭そうに頬を赤らめる。

「あー、お前さっ」

空気を換えようとわざと大きな声で恵介が言う。

「今日、部活終わったら校門のところで待ってるよな」

「えっ……」

「そろそろいいだろ、今日は家に寄っていけよ」

恵介の言葉に、礼一郎が困惑した顔で俯いた。あれ以来、お互いの家を訪ねた事はまだ無い。先方の親に気ま

ずくて、なかなか敷居を跨ぐ事が出来ずにいた。

「ガレージならいいってよ」恵介がボソリと言う。

「へ？」

「だーかーらあー、ガレージの二階の物置部屋！ あそこでならそーゆー事してもいいって親に言われたんだよ。オレ、丸2日かけて掃除して、ちゃんと新品のマットレスも入れたんだぜ」

恵介が口を尖らせて言う。

礼一郎の顔がみるみる紅潮し、耳まで真っ赤になった。

「で、でもっ……」

「しょうがねえだろ、ラブホなんて高くてそうそう通えねえし、バイトする暇だつてねえんだからよ」

図らずも親公認の仲になった事で、交際を隠す必要が無いのはありがたかったが、そういう行為まで筒抜けというのはやはり恥ずかしい。もし事後にバツタリ御両親と鉢合わせるような場面になったら、一体どう取り繕えばいいのだろうか？

「なあお前、オレのアソコがどうなってるか、見たいん

じゃねえの？」

逡巡する礼一郎の耳元で、恵介が低く囁いた。礼一郎の股間がズキンと痛む。

この一週間で、剃毛された礼一郎の股間の毛は2・3ミリまで伸びて、ジョリジョリのヤスリ状態になっていた。これを恵介の剃りたて・すべすべパイパンに擦り付けたら、きつとバカらしくて楽しくて、そして興奮するに違いない。

「……い、行くよ」

誘惑に抗えなかった礼一郎がどもりながら言った。

「よし！ またたっぷり泣かせてやるからな」

恵介が悪戯っぽくニヤリと笑った。つられて礼一郎もニヤニヤしてしまう。

部活後に行われるであろう、交歓の儀式への期待に胸と股間が膨らみ、卑下た薄笑いを浮かべる二人。そんな彼らの下心をたしなめるようにチャイムが鳴り、昼休み終了の時刻を告げた。

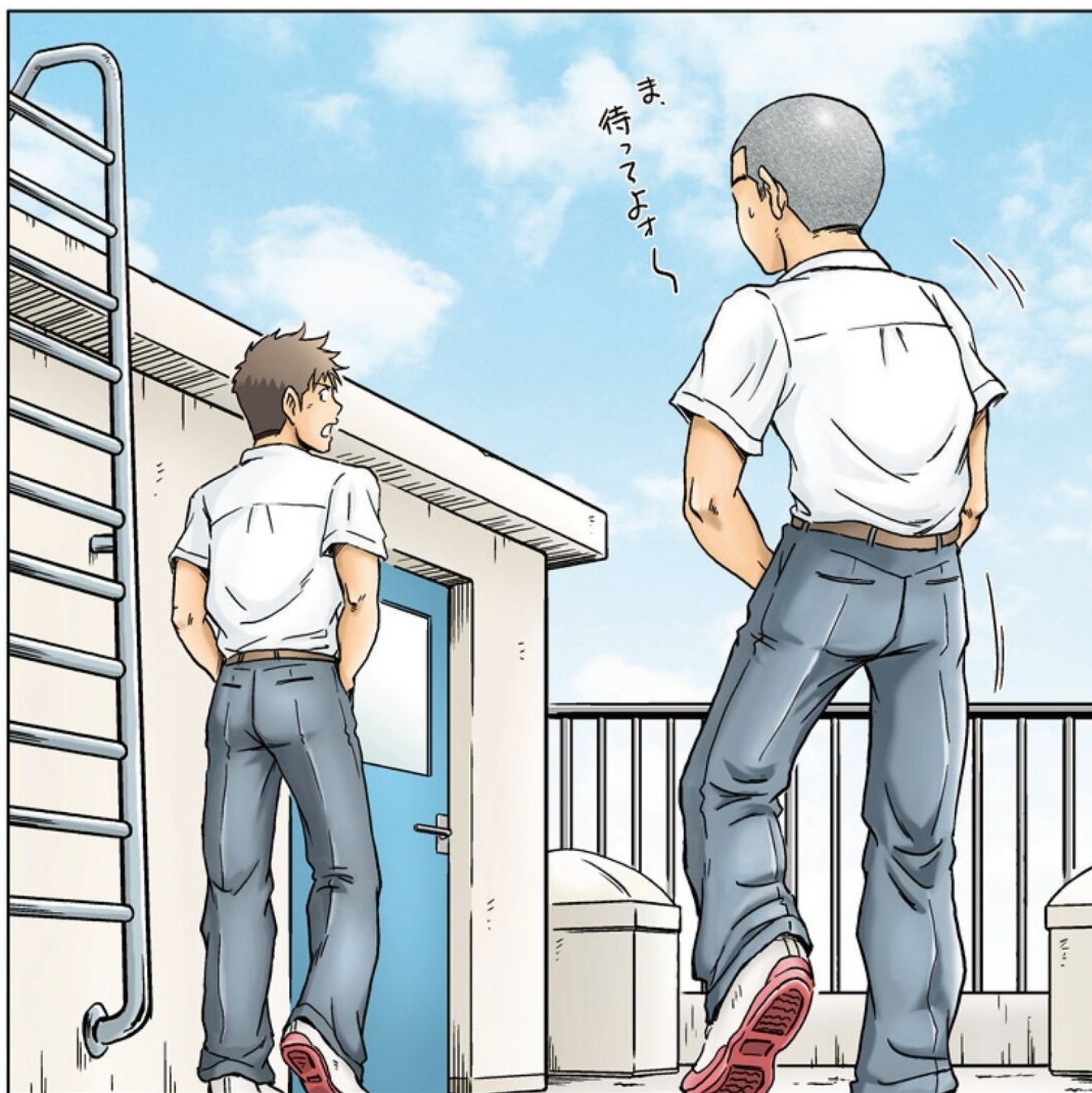
「ほら、もう教室戻るぞ。早いトコその勃起チンポどうにかしろって！」

恵介は制服のズボンに盛大にテントを張った礼一郎の股間をバシッとはたくと、とつとと出入り口に向けて歩き出してしまった。

「ま、待ってよお」

慌てて股間の疼きを必死で宥めながら、ヒヨコヒヨコとその後を追う礼一郎なのであった。

(おわり)



奥付

◆ 発行日：2019 年 3 月 23 日

◆ 発行元：Eng

URL▷ <http://eng.dojin.com>.

MAIL▷ engacho69@gmail.com

- ※ 本作の内容は成人向けとなっております。未成年への譲渡・貸与等はやさらないようお願いします。
- ※ 個人での利用目的以外の複製・二次頒布・インターネット上へのアップロード行為は、著作権の侵害となり罰せられます。
- ※ 本作品はフィクションです。作中に使用された名称等は、実在の個人・企業・団体等とは一切関係ありません。

Produced by

ENG

<http://eng.dojin.com/>